
ファンタシースターポータブル2i ~ 異世界の5人 ~

サイクロン&ハリケーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタシースターポータブル2i〜異世界の5人〜

【Nコード】

N4736Z

【作者名】

サイクロン&ハリケーン

【あらすじ】

それは遠い星のお話。軍事会社リトルウィングにルーク・フィレンという青年がいた。彼は亜空間事件を解決した英雄である。

そして欠片事件から半年後がたったある日、何やら怪しい5人がある会話をしている。彼等は何者なのか、まだ知るのは先の事であった。

23歳の誕生日を迎えたディオ。そして、ディオは4年前の事を思い出していた時、耳に懐かしい声が聞こえたような気がした。し

かし、その声は、助けを呼ぶ声だった・・・

プロローグ：謎の5人（前書き）

初投稿です。自信がないですが、どうぞ御覧ください（ちなみに主人公はまだ出ません）。

プロローグ：謎の5人

? 「ここは、どこだ？」

? 2 「どうやら成功したみたいだね。」

? 3 「ああ、そのようだな。」

? 「失敗するかと思っただが……、何もなくて良かった。」

? 4 「失敗するわけないツスよ。俺が造ったんツスよ。」

? 5 「その様なしゃべり方だから、そう言われるんだ。」

? 2 「でも、彼の腕はたしかだよ？」

? 4 「良いこと言ってくれるじゃないツスカ。」

? 「そんなことより、本当に大丈夫なのか？」

? 5 「ああ、大丈夫だ。準備はできてる。俺達の目的を達成させよう。」

? 「ふっふっふ、そうか。」

? 3 「時間もなし、もう行くつぜ。」

?2「そつだね。」

?5「さてよ、先々行くのは良くない、そつだなまずは……。」

プロローグ：謎の5人（後書き）

うーん、とりあえずここまでですね。誤字、脱字がありましたら、教えてください。

第一話：依頼 1（前書き）

続けて投稿です。前回は会話だけだった。でも後悔はしてないようなあるような。

まあ前回は気にせず御覧ください。

第一話：依頼 1

「マイルーム」

この部屋に1人の青年がいた。彼の名はルーク・フィレン、亜空間事件を解決した英雄である。だが、今は彼はベッドで寝ている。病気出もなく怪我したわけではない。彼に取って久しぶりの休日になる……はずだった。

コンコン

「はい。」

「ルーク？いる？」

「（うるさいのが来たな）ああ」

扉が開き姿を見せたのはエミリアだった。

「何よ、その返事は？」

「別に（言ったら殺される）で、何のようだ？」

「うーん、実はさ。あなたにお願いしたい事があるの」

「なんだ？」

「実はナギサに声をかけたんだけど、依頼が入っていけなくなった

んだ。」

「んで？」

「だから、あんたに来てもらいたいんだ」

「どこに？」

「依頼」

「依頼？……悪いが、今日は俺は休……」

「お父さんに声を掛けたら、ルークと行けと言われた」

「おいおい……」

「ルーク……お願い」

少し考えて、ため息を付き

「わかったよ。付いて行けばいいんだろ？」

と答えエミリアが笑顔で

「ありがとう」と答えた。

「やれやれ」と言いながらベッドから出でる。

「依頼内容は？」とエミリアに聞く。

「うーん、何かパルムで不審な5人を見たんだって。」

「その5人を何者が調べると。」

「そう、その通り」

「さっさと終わらせよう。せつかくの休日なのに仕事するなんて」

「ぶつぶつ言わないの。はやくい」

「やれやれ」 咳きながら、部屋を出た。

第一話：依頼 1（後書き）

やっぱり小説は難しいですね。でも頑張ります。
……うん、頑張る

第一話：依頼2（前書き）

少し編集しました。

ルーク「編集して、余計変になっただんじやないのか？」

そ、そんなことないさ・・・。

第一話：依頼2

〳〳パルム草原〳〳

依頼を受けたエミリアと無理やり依頼を受けさせられたルークがいた。

「エミリア？ここに依頼にあつた不審な5人を見た場所か？」

「うん。そうだけど、誰もいないね？」

「だが、油断はするなよ。いきなり襲つて来るときもあるからな。」

つとエミリアに注意を促した。

「わかった」つと返事をするエミリア。

「とりあえず、辺りに誰かいないか、搜索するか。」

「そうだね、まずは人を探さな・・・。」

「！！？エミリア！！伏せる！！」と叫ぶルーク。

「え？」

「ちっ」とエミリアを無理やり右に押す。

「痛っ」と地面に尻餅をついたエミリアが声を出す。

「くそ、どこからだ」辺りを見渡すルーク。っとそこに。

「あゝあ、外しちゃった。結構自信あったんだけどなあゝゝ。」
と声がした。

「誰だ!!」っと声がした方向に声を出した。

「普通、自分から名乗るものでしょう? 礼儀をしないの?」

「なに?」

「いたたたっ」お尻を擦りながら立ち上がるエミリア。

「大丈夫か。エミリア?」

「人を押し倒しといて、その台詞言うかな? まあ大丈夫だけど。」

「わりい、その方法しかなかったから。」

「いやいや、その他にも方法があるでしょう!？」

などの会話をしていると、

「何?漫才でもやってるの? あんまり面白くないよゝゝ」

「姿を見せないお前に言われたくない。っていうか漫才なんてして
いない」と声がする方向に喋る。がしかし、

「どこ見て喋ってるの?、後ろだよゝゝ。君の後ろ」

「「!!!??」「と振り向く2人。

「いつからそこに?」っと、ルークが質問をする。

「『お前に言われたくない』って辺りかなあ〜?」

「うっう、何かしゃべり方が腹が立つ。「っとエミリアが言う。

「あははは、いい慣れてるから、痛くも痒くもないよ〜。どう?
?余計に腹が立ったでしょう?」

「それより、どうやって後ろに?」ルークが質問をする。

「あまり腹が立たなかったみたいだね〜、まあ、いいや。それより
答えないとね〜、君の質問に〜。簡単だよ〜。僕ちんの特殊能力だ
よ〜。」

「特殊能力?」

「特殊能力って言っても、ピンと来ないと思うよ〜。まあ、さらに
簡単に言うかね〜、・・・僕は普通の人間じゃあないんだよ。「
言い方が少し悲しそうに話す。

「えっ?」

「でも・・・、どつでもいいことだよねえ〜。おっと忘れるとこ
ろだったよ〜。「っと、何かを思い出したかのよつに、背筋を伸ば
して喋る・・・が。

「実はさ〜、君達にお願いがあるんだ〜」全く礼儀のない言い方で
ルークに言う。

「誰がお前のお願いを聞くもんか。」っと、そう答えるルークに。

「ほんと。襲撃しといてなによ、それ？しかも、礼儀がまったくな
いし」

エミリアもそう答える。

「困っている人を助ける仕事なんでしょう？助けてよ〜。子供だ
よ？僕ちゃん」

「子供も大人も関係ない。襲撃した理由を聞き出してやる。っってい
うか自分からいうか？『子供だよ？』って」っと言いながら、シッ
プウジンライを構える。

「子供だから、子供って言ったただだよ〜。それよりなに〜？子供
に武器使うの〜？大人げないなよ〜？ま、武器を使っても君は勝て
ないけどね〜」

っと言いながらゼロセイバーを構える。

「エミリア！！下がってろ！！」

「ルーク、あたしも戦うよ」

「パートナーの言う事聞くもんだよね。って君が戦っても足手まといになると思うよ。」

つと笑いながら言う。

「うっさい、あんたに聞いて……」

「エミリア。下がってる……大丈夫、そう簡単にやられないさ。」

「つと真剣な顔でエミリアに言う。エミリアも観念したのか、

「わかった。」つと、答えた。

「さてと、準備はいいか？」つと子供に言う。

「僕ちゃんは、いつでもいいよ」。あ、そうそう、僕ちゃんの名前はミケ。ミケ・ラン・ジャータン」

そしてミケはルークに飛び掛かる。

第一話：依頼2（後書き）

とりあえず、ここまで。

ルーク「やっぱり、内容が」

誤字、脱字がありましたら教えてください。

ルーク「無視するなよ」

第一話・依頼3（前書き）

初戦闘シーンです。

ルーク「俺の出番が多くなるわけだ（内容は心配だけど）」

では、どうぞ

第一話：依頼3

「ふっ、遅いな」っといきなり飛び掛かるミケに対し、右側に避け、ミケに攻撃の体勢をしようとした時、

「君がねっ」っと言った瞬間、地面に左手を付き、左手をグイッと地面を押し飛び上がり、ゼロセイバーをしまい、インフィニットブラスターを構え、ルークに射つ。

「!!!!!!」

攻撃の体勢に入っていたせいか、顔を左に避ける事しか出来ず、2つの弾の内、一発頬にすれた。そして、そのすれた所から血が出てきた。

「ルーク!!!」っと呼んだエミリアが戦いに加わろうとしたが、

「下がってろっっていただろ!!!」っつとルークが叫ぶ。

「あんな奴、一人で戦おうなんて、言う方がおかしいよ!!!」

「あははは、仲間割れしてる〜」っつと地面に着地していたミケが、いつの間にかインフィニットブラスターをしまい、ゼロセイバーを回しながら、嘲笑う。

「ちっ、調子に乗りやがって」

「ルーク!!!」

「……分かったよ、だが、無理だけするな」

「あんたも、無理はしないでよ」

「ああ、分かった」

「あちゃ〜、2対1になっちゃった〜。でもね〜、僕ちゃんはね〜、2対1でも勝てるんだよね〜。」ゼロセイバーを回しながら言う。

「その自信、いつまで続くとおもうなよ」

「パートナーに『下がってる』っていった奴がそのセリフって……あははは、変なの〜。」

「お喋りは、ここまでだ」っとミケに睨み付け、シップウジンライをしまい、アカツキ・印を持ち、ミケに向ける。

「あたし達をあまりなめないで」クラールリタ・ヴィサス？を持つエミリア。

「別になめてないけどな〜、」っとまだ嘲笑ってるのか、ゼロセイバーを回してる。

「その言い方とその態度が腹が立つっての。」っとエミリアが言う。

「あつ、そうなんだ〜、だったらねえ〜」っとゼロセイバーを回すのをやめ、

目をつぶるミケ。そして……ゆっくり目を開け……

「……、普通に喋ればいいんだね」っと言い、ゼロセイバーをしまい、何やら構えをとり、そして……。

「じゃあ、戦うことも普通にいかせてもらっよ。もう手加減なしだよ！！本気でいくからね！！」っと言った瞬間体が光始めた。

「「！！！！」」

2人が驚く。

2人の前に姿を表したのは、暴走中のナノブラストの姿であった。

「ばっ、バカな」っど驚くルーク

「嘘でしょう！？何でヒューマンがナノブラストができるのよ！！」っど叫ぶエミリア。

(言い忘れましたが、ミケはヒューマンです)

「言ったはずだよ、僕は普通の人間じゃあないって、あと1つ言っとくけど、僕のナノブラストは時間制限はない。僕のナノブラストを止めることが出来るのは」

「お前を倒す事だ。」

「そのとおり。それと、自分の意思でも止めることも出来るんだ。さてと、お喋りは終わりだったね。じゃあ望み通り終わらせてあげよ。君達が死ぬことで。」っどルークに飛び掛かりあっという間

にルークの目の前に来ていた。

「!?(速い)!!」と思ったルークだが、

ドン!!

腹に蹴りを入れられ、吹っ飛ぶルーク。

「グッ!!」ルークが飛ばされる。

しかし、凄いスピードでルークに追いついたミケがルークを踏み台にするかのように、おもいきり腹を踏む。そしてルークが地面に叩きつかれる。

「ぐぐはぁッ!!」地面に叩きつかれたと同時に口から血を出す。

「ルーク!!」っと近寄るが、

「……終わりだ、ルーク……」っと言い残しルーク止めを指そうとしたが、。

……。

「言っただろ?お喋りは終わりだっつて。」っとニヤリと笑ったルーク。

「ばっ!!!!」っつとびっくりしたミケ。その訳は……ルークがアカツキ・印で攻撃を防いでいたのだ。

何かを察知したミケだが、気付くのが遅く何かにぶつかり、遠くに吹っ飛ぶミケ。それはエミリアが放ったミラージュブラスト、コンル（氷刃ノ疾風）だった。

遠くに飛ばされた先には、大きな木が一本立っており、その勢いのまま、ミケは木に叩き付けられた。

バツキイイイ〜ツ

つと木が折れた音がし、勢いが強かったせいか、そのまま木を通り越し、折れた木を少し離れた所で、地面に落ちた。

「ふう〜」。・・・（・・・終わつたかのか？）「つと警戒をルークは息を吐く。」

「ルーク!!大丈夫?」

「ああ、何とか。しかし、エミリア?なぜブラストがたまつてたんだ?」

「ああ、それ?実はバスクからもらったのを食べたんだ。これだよ。」

「ん?そのクッキーみたいなやつ?」

「そうだよ、これ美味しいんだよ。」

「まあ戦闘中に食べるのはどうかしてるが、とにかく助かったよ。ありがとな、エミリア。」つとエミリアにお礼をするルーク。

「最初の言葉が気になるけど、まあいいか。」っと笑うエミリア。

「ふふっ」っとつられて笑うルーク。

「あっ、それよりルーク？あいつどうする？」っとルークに聞く。

「そのままにしとくのは、あれだしな。とりあえず連て帰るか。」

「えっ？」っとエミリアが言った時、

「くっっっ」

「「！！！！」」

「ま・・・まだ・・・まだだ・・・僕は・・・まだ・・・負け・・・てない・・・」かなりフラフラになりながら立つミケ。あまり力が無いのかナノプラストの状態ではない。

「「・・・」」

そのミケを見たルークとエミリアがそれぞれ違う反応した。

「やれやれ」っとルーク

「あれだけ、やられておいてまだ立つかな」っとエミリア

「さあ、いい」っと言うミケだったが、その時。

？「あつ、見つけたぞ、ミケ。」

？2「あの野郎、またやりやがったな。」

「！！！！」

その声に驚いたルークとエミリアは、声が出たほうを見た。そこには、2人が歩いてくる。1人はミケと同じヒューマンで18〜19歳ぐらいの背の高い青年。もう1人はデューマンで15〜16歳ぐらいのなかなか背の高い少年がやって来た。

第一話・依頼3（後書き）

誤字、脱

ルーク「ちょっと、いいか（怒）」

あれ？何で、怒っ

ルーク「ミラージュブラスト！！！」

ぎゃ~~~~~。

エミリア「誤字、脱字があったら教えてね」

そ……それ……俺の……セリフ……

第一話：依頼4（前書き）

何回も読み直したから多分大丈夫です。

つと言っておきながら、少し訂正しました。

ルーク「また、訂正するんじゃないか？」

そ、そんな事はない、．．．うん。

ルーク「はあ〜」

第一話：依頼4

18〜19歳ぐらいのヒューマンの青年が、ルークとエミリアに近づく。

？「すみません、僕の弟が迷惑をかけましたか？」

？2「兄貴、ミケのあの姿とこの2人の疲れ具合を見る限り、迷惑をかけたに決まってるだろ？」

15〜16歳ぐらいのデューマンの少年が言う。

「あ、あの〜、あなたたちは？」とエミリアが2人に訪ねる。

？「ああ、。申し訳ありません。紹介が遅れました。僕の名前は、ディオオン。ディオオン・バーデン」

？2「俺は、ソロ。ソロ・レスター」

つと青年と少年が自己紹介をする。

「俺の名前は……」

つとルークが自己紹介しようとしたが、

「君たちのことなら、よく知ってるよ。ルークさんとエミリアさんですよね？」

「「えっ?」「っと驚くルークとエミリア。」

「ど、どうして、あたし達の名前を?」

「何故って、お前達よく雑誌などに載ってじゃあねえかよ」

「雑誌に載ってるだけで、実際パツと見ただけで、分かるものか?」
「っと聞くルーク。」

「……、分かったよ、正直に言っよ。」「っとディオオンが言っ。

「いいのか?兄貴?」

「言わないと、疑われるからね。だが、その前にミケのことで謝らないと」「っとディオオン。」

「まったく、アイツのせいで、仕事もやりにくくなるだらけだ。」「
」つソロが右手を頭に当て、ため息をつく。

「ミケ、こっちにこい」「っとソロが叫ぶ。

「……。」「ムスツとするミケ。しかし、

「僕の頼みでも……かい?」「っとディオオンがいう。

「ッ!!!」(顔は笑っているが、なんだ、この威圧感は)「っとルークは感じた。

ミケはしぶしぶ頷き、ゆっくりディオンの近づく。

「瞬間移動みたいな特殊能力が使えるんだから、使えばいいじゃん」と言っただエミリアだったが、

「力が残ってないから、使えない」と苛立ちながら言う。

「ミケ!! さっさとこの2人に謝れ」とミケ言うソロ。

「……ごめん」とミケが心がこもってない謝り方をする。

すると、

ドカツ!!

ディオンのミケを叩きつけ、ミケの頭を押しながら、

「ちゃんと謝りな? ミケ。」とディオンの言う。

「痛い痛い、ディオン兄さん、痛いよ。」と痛がるミケ。

「謝りなさいって、言ってるんだよ。」とさらに押し付けるディオンの。

「うわ~~~~、痛そう。」とエミリアが言った。

「わ、分かった。ご、ごめんなさい!!」とミケがもう一度謝る。

「いいよ、よく出来たね。」つと言いながら、ディオオンが押し付けた手を離す。

「だいたい、人を襲撃しといて、謝るだけでいいのか？」つと疑問がるソク。

「そうだね、どうしたらいいかな？」つとディオオン。

「えっ……、僕、謝った意味くない？」つとミケ。

「……もう一度、謝るかい？」つと笑顔でミケに覗む。

「いやいや、もういいよ」

「はあ……、どうする？ルーク？」つとエミリアがルークに言う。

「まあ、俺たちも戦って、ミケに傷付けたしな。」つとルークが答える。

「そうだ、君たちも謝……、痛ッ！！」またディオオンに頭を叩きつけられる。

「もう一度、謝りなさい」つとディオオンがミケの頭をさっきより強く押しながら言う。

「じめんなさい……」

つとミケ。

「はあ〜、」また右手を頭に当て、ため息をつくソロ。

「1ついいか？」っとルークがディオンの質問をする。

「はい、何でしょうか？」っと威圧感のない笑顔で答えるディオン。

「お前たちは・・・」っと質問をしようとしたが、突然、

ピピピピピピ

っとエミリアの通信がなった。

「誰からだ？」っとエミリアに言うルーク。

「ええっと、お父さんからだ」っと通信に出る。

『おい、エミリア、ルーク。依頼に会った不審人物の5人がガーディアンズに捕まった。どうやらガーディアンズが巡回中に見つけたらしい。不審な5人なんだが、元ローグス3人と強盗2人だったらしい。どうやら5人で銀行を襲う計画をしていたらしい。やつらの持ち物からそれらに使う道具もあった。』

『っていう事だから、帰って来てもいいぞ。』

「っていつか、依頼を受けてたの忘れてたな。」っと右手を頭に当てるルーク。

「いろいろあったもんね。さすがにもう疲れたよ」っとエミリアが答える。

「そうだな、久しぶり凄い戦いをしたしな」っとルークも言う。

「そういえば、質問があるって言ってたね？」とディオンのルークに言うが。

「兄貴、俺が見る限り彼らは疲れてるし、長話もあれだ。日を改めないか？それにミケの説教しないと」とソロが言う。

「えっ……また……説教？勘弁してよ。」と叫ぶミケ。

「うん、僕はその意見に賛成だけど……、君たちは？」

「そうだな、とりあえず今日は帰ろうか？エミリア？」

「いいの？ルーク？まだ会って時間も経ってないのに信じていいの？」と言うエミリア。

「とりあえず、日を改めて話すことにするよ。」と答えるルーク。

「じゃ、この店で話すから……。」とルークに店の名前が書いていたパンフレットを渡す。そして、クイツと首でパンフレットにやる。

「……分かった、じゃこの店で、」と何かに気がついたルークは、パンフレットをしまいながら、言うルーク。

「じゃ、3日後に」とディオンの言う。そして、ディオンの

「さてと、ミケ、ソロ行こうか。」といい何やらボタンをいじっ

てる。数秒後船が真上に止まり、ゆっくり降りてきた。

「じゃ、3日後に」っとディオオンが右手をあげながら船に乗り、その後にはソロ、ミケが続く。ミケは少しまだ、フラフラしている。そしてミケが振り返り、頭を下げる。

ドアが閉まり、ディオオン達の乗った船は立ち去って行った。

「エミリア、俺たちも帰るか。」っとエミリアにいい、

「そうだね、帰ろうか。」っとエミリアが船を呼ぶ。ディオオン達の船とは違い、ふねが着くのは遅い。数分後、船が到着し、ゆっくり船が降りてくる。

「さあ、帰ろうか?」っとエミリアが言う。

「そうだな」っと船に乗ろうとしたが、

「???」っと不意にルークが振り返る。

「……」辺りを警戒してるのか、辺りを見渡している。

「何やってるの、置いていくよ。」

「気のせいかな?」っと警戒していたルークだが、エミリアが急かされたので、急いで船に乗る。

そして、エミリア達の乗った船が飛び立って行った。

……ガッツ!!!

? 「危ねえ、危ねえ、アイツ警戒してたよ」

? 2 「あの人、なかなかの腕前だったね。凄い戦いだっただね。それもある子供も」

? 3 「ま、俺たちの相手じゃないだろう。まだあの腕じゃ」

? 5 「でも、あいつと戦いたい。っていうか今直ぐにでも」

? 「よせ、よせ、まだ俺たちの力を見せるのはあとだ。」

? 3 「そうだな」

? 4 「はあっはあっはあ、やっと見つけたツスよ。置いくなんてひどいツスよ」

? 「わりいな、さてと、行くか」

? 2 「そうですね。私達の計画を達成するために」

第一話：依頼（終）

第一話・依頼4（後書き）

まず1つとして、エミリア達の船を呼ぶようにしたのは、ミケが船を壊してしまうので呼ぶようにしました。

正直に言つと、どうやってパルムに？や船はどうしたの？と書いてて思ったのでそのような形になりました。

1 1 依頼報告（前書き）

第二話では、ごぞいません。第二話が始まる前ですので、1 1に
しました。

最初の1 は、第一話、みたいな、ものです。

では、ごいせう。

1 1 依頼報告

（リトルウィング）

リトルウィングにしたルークとエミリア。そうしてエミリアがルークに言う。

「あんた、本当に怪我、大丈夫なの？」とエミリアがルークの怪我の心配をする。

「ああ、何とかな。」と答える、ルークだが……

「そんなこと言うけどさ、あの時の傷が大きくなったら……」
つとと言う。

そう、ルークは一度、怪我をしたのである。だがルークは、

「大袈裟だよ。単なる、かすり傷だろ？」とルークは、言うが。

「あれが、かすり傷って言えたもんね。鍼を縫うほどの、怪我だったのに」

「怪我を心配してくれるのは、嬉しいが、クラウチに依頼の報告しないと。まあ、不審人物の5人はガーディアンズ達が捕まえたがな」と言うルークにたいして。

「あの3人の事、話すの？」とと言うエミリア。

だが、ルークは、

「いや、まだ言わない方がいい。彼らを知らなさすぎるからな。」
っとルークが答える。

「でも、その怪我を見て、何か会ったって、聞かれたらどうするの？」
っとエミリアがルークに聞く。

そしてルークは、

「よそを見たら、崖から落ちたとしても、言えればいいだろ。」
っとルーク言う。

「……絶対信用しないと思う。」
っとエミリアが呆れながら言う。

「まあ、その時に、言い訳を考えよう。とりあえず、事務所に行く。」
っとルークがエミリアに言う。

「(スツゴい、心配なんですけど)」
っと、口では言わず、心の中で思いながらルークに付いていくエミリア。

〈リトルウィング事務所〉
プシュ、

っとドアが開き、事務所の中に入る、ルークとエミリア。奥には、
クラウドがいた。

「クラウド。今帰ったぞ」
っとルーク。

「おう、帰ったか……。ってか、おめえ、どうしたんだよ？その怪我は？」っと聞いているクラウチ。

「これか？油断していたら、原生生物に攻撃された。」っとルークが答える。

「……。そうか。エミリアは怪我はないのか？」っとエミリアも聞く。

「あたしは特に痛いところは、ないよ」っとエミリアが答える。

「んで、何のようだ？」っとクラウチがまた質問する。

「依頼の方は、ガーディアンズが片付けたが、一応、依頼報告をしようと思ったんだよ」っとルークが答える。

そして、更にルークは言う。

「もう少し、あの辺を搜索した方がいいかもしれない」っとルークが答えた。

「えっ？」っとエミリア。

「なにっ？」っとクラウチ。

「どういう意味だ？」っとクラウチが質問する。

「……。単なる勘だ」っとルークが答えた。

「「?????」「つとクラウチとエミリアが頭の上に、?マークが浮かぶ。」

「……それより、ルーク。今日、おめえ、休みだったな?今日はもういいから、部屋で休め。今日の休日は明日にするからよ。」
つと行つたクラウチだが。

「なあ、クラウチ?その休日、3日後にしてくれないか?」つとルークが言う。

「んっ?何でだ?」つとクラウチが聞く。

「その日、少し行きたい場所があるんだ。もしかしたら、1日になるかもしれない」つとルークが答えた。

「????、まあ、おめえさん、が3日後にしたいなら別にいいけどよ」つとクラウチは許可をした。

「(やっぱり、行くんた……)」「つとエミリアが心配そうに、心の中で呟いた。

「じゃ、クラウチ。俺はこれで、失礼するよ」つとルークは、右手を上げ、事務所を出た。

ルークが部屋を出たのを確認すると、

「んでだ、アイツ、何で怪我をしたんだ?」つとエミリアに聞くクラウチ。

「えっ？あ、あいつ、いつ、言ってたじゃん。げ、原生物に攻撃されたって」っと焦りながら言うエミリア。

更にクラウドは、

「あんな嘘、ガキでも言えらあ。嘘を聞かされて、素直に、はい、そうですか？って言うわけねえだろ？だいたい、急に襲われたからと言って、あんな怪我はしないだろ？アイツならなあおさら。」っとクラウドが言う。

「うううっ、」っと更に焦り、言葉を失うエミリア。

「……、お前のその焦り様から見て、やはり、原生物に攻撃されたのは嘘だな？」っとエミリアに聞く。

もう、観念したのか、エミリアは

「うん、」

っとエミリアは頷いた。

クラウドは右手を頭に当て、ため息をつく。

「詳しいこと……話せるか？」っとクラウドはエミリアに聞く。エミリアは、コクリっと頷き、依頼中に、あったことを話した。

「なるほど、んで、3日後に会おう、ってことで、休日を3日後に

したんだな?」っと難しい顔する。

「うん・・・」っと、エミリアは、頷いた。どこか、元気がない返事だった。

「まあ、さらに詳しい内容は、アイツから聞くとして、エミリアは今日はもう、休んでいいぞ。」っとクラウドが言う。

「うん、わかった」っとエミリアは答え、エミリアも事務所を出た。事務所出てすぐに、

「クラウドに、話したんだな?」っと不意に右から声がした。

「うええっ?」っとエミリアが驚く。

声がした方を見ると、ルークが立っていた。なにやら怒った顔している。

「クラウドに、話したんだな?」って聞いてるんだ!!」っとさっきより大きな声で言う。

「あ、あたしだって、言いたくなかったわよ!!。でも、お父さんに聞かれて、仕方がなく。そもそも、あんたの嘘が、下手だから、こうなったんじゃないの!!?」っとエミリアも怒鳴る。

「だから何か?それで話してしまうのかよ!!」っとルークが言う。

ガヤガガヤ

つと回りが騒がしくなる。

すると、事務所からクラウチ、ウルスラ、チエルシーが出てきた。

「おい、ルーク！おめえ、いい加減にしるよ！！」つとクラウチが怒鳴る。

「エミリアの言う通り、正直に話さない、おめえが悪いんじゃないのか？」つとクラウチがルークに言う。

「正直に話さない？それだけ、俺が悪いのか？話せない事を聞くあんたも悪いじゃないのか？」つとルークがクラウチ言う。

「てめえつ」つとクラウチ言うが、

「ルーク！！あんた、本当にいい加減しなさいよ！！」つとまたエミリアがルークに怒鳴る。

「はぁ……、わかったよ……」

つとルークは、そのまま部屋には行かず、マイシップに入ってしまった。

「てめえ、まだ話しは」つとクラウチが言うが、ルークは無視して、マイシップに乗る。

そして、そのままどこかに行ってしまった。

「エミリアっ？アイツに酷いこと……」言われたのか？って言

おうとしたクラウチだが、

「……………」エミリアは涙を流してた。

「エミリア！！」っと心配したクラウチ。

「どうしたんだよ？本当にアイツに酷いこと言われたのか？」っとクラウチが焦って、エミリアに聞く。

「……………」エミリアは答えない。いや、答える事が出来ない。エミリアは後悔していた。無駄だと分かっていたながら、クラウチに嘘を言ったルーク。それなのに、嘘が下手だからっと言い、ルークのせいにした。いや、気にしてるのはそこではない。今までルークとあれほどまで、口喧嘩をした事がない。そして、マイシップに乗るルーク。そう、それはまるで、家を飛び出した自分と似ている出はないか。それをエミリアは気にしていた。何しろ、ルークは戦いで怪我をしている。前の傷も完全に治ってもいないにも、かわらず。エミリアはそれを気にしていた。

「仕方ねえ、ルークの方は俺が追う。エミリアはこのまま休め。いいな？」っとクラウチが言うが、

「お父さん、あたしも行く」っと言つエミリア。

「なに？」っとクラウチが聞き返す。

「嫌な予感がするの……………」っとエミリア

「嫌な予感だと？ちっ、仕方ねえ。ウルスラ、チェルシー、ちよっくら、行ってくる。留守は任せたぜ。」っとウルスラとチェルシーに声を掛ける。

「わかったわ。」っとウルスラ。

「ちゃんト、つねテ、帰って来てヨ」っとチエルシー。

そしてエミリアとクラウチはマイシップに乗り込んだ。

1 1 依頼報告（後書き）

登場人物の紹介は、次の話が終了したら、書こうと思います。

ルーク

ディオオン

ソロ

ミケ

????（次の話に登場）

の五名です（ちなみに、この登場人物の紹介はオリキャラの紹介です
ので、エミリア達など紹介はしません。）

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

ルーク「次話もよろしく」

1 2 悲しい決断（前書き）

うん、少しずつですが、書くのが慣れました。しかし、もっと頑張ります。

では、

1 2 悲しい決断をご覧ください。

1 2 悲しい決断

くパルム大都市・ショッピング街く

たくさんの人で賑わう、パルム大都市のショッピング街。その中に人の青年が歩いていていた。

「はあ〜」

つとため息をつく青年。そう、ため息をついた青年はルークである。

「俺、何であんな事を言ったんだろ」

つとリトルウィングで自分が言った事を後悔していたのであった。

「あんな事を言って、更に逃げたんだ、帰りにくい」

つとなど独り言を言っていると、後ろから、

「何をブツブツ言ってるの？」つと声がした。

振り返ってみると、そこには、1人の女性だった。

「……、なんだ、お前か。」つとルークは女性に言った。

「なんだ、つとは何なの？久しぶりに再会したのに、最初の言葉はそれ？」つと女性は腕組みをしながら言った。

「ほんの二年前に会っただろ？」つとルーク。

「違うわよ、三年前よ。お父さんやお母さんの誕生日やお盆（お盆がある設定）に帰って来ないのは、”お兄ちゃん”だけだよ。」と女性が言う。

「なんと言えばわかる。俺を”お兄ちゃん”って呼ぶなって言ってるんだろ。ソラ。」

「お兄ちゃんだからお兄ちゃんって言って何が悪いの？」

「恥ずかしいんだよ！！」と女性に怒る。

ルークの話していた、女性、ルークの妹のソラ・ミル・オルテガである。

そしてソラは、

「じゃあ、何て呼んでほしい？お兄ちゃん？兄さん？それとも、デイオ兄さん？」

「最後のはやめろ」っとルーク。

「……、いつまで、自分をかくすの？」っとソラ。

「……」っと黙るルーク。

「今まで”デイオ”として生きてきたのに、なぜ偽名を？」っとソラ聞く。

「やっぱり、兄さん。リトルウィングを辞めるつもりなの？」

とソラが聞く。

「ああ、そうだ。いや、そのつもりだったんだが……。」
つとまた黙ってしまうルーク。

「辞めるに辞められなくなってしまった。」つと続きを言うソラ。

「ああ、そうだよ。今、思うとなぜ偽名を使ったんだか……。」
つと後悔するルーク。

「じゃあ、どうするの?」つとソラが聞く。

「この先もルークとして生きるか、それとも、ルークを捨てて、デ
イオとして生きるか」つとソラが言う。

「……。」下を向くルーク。

「お兄ち……、兄さん。」

「……俺は、」つと答えを言おうとしたルークだが、

「あつ、いたいた。ちよつとお姉ちゃん。置いていかないでよ。」
つと後ろから男の子がやって来た。そして、

「もう、酷いよ……って、うわっ、デイオお兄ちゃん。」つと
驚く男の子。

「よお、リオル。久しぶり」つと男の子に言う。

「ほんと久しぶりだよ。雑誌などでお兄ちゃんの活躍を見たよ。すごいねえ、亜空間事件を解決するなんて、しかも英雄だよ」「っと笑顔で言うリオル。

この男の子の名前は、リオル。リオル・ルタ・オルテガ。ルークの弟である。

そしてリオルは、

「あつ、しまった。今はディオじゃないもんね。ルークだった。」「っとリオルが言う。

「いや、ディオいい。」「っとルーク。

「お兄ちゃん?」「っとソラが言う。

「今日、限りで、ルークを捨てる。そして今日からディオで生きていく。」「っとルーク。

「いいの?お兄ちゃん」「っとソラ。

「ああ、もう決めた。……それに……。もう、あそこ(リトルウィング)には、帰れないしな。」「っとルークが言う。

「じゃあ、退社するの?」「っと聞くソラ。

しかし、ルークは、

「いや、ルークは……。死んだ事にする。」「っとルークが信じられない事を言った。

「えっ?」「っとソラとリオル。

「退社をすれば、あいつ(エミリア)が探すかも知れないし」
「っと言うルークだが。」

「それだけは、絶対にダメ」
「っとソラ。」

「お兄ちゃんが一番分かるでしょう?もしもルークが死んだ事にしたら、一番悲しむのは、エミリアさんよ」
「っとソラが少し怒りがこもった言い方をする。」

「……」
「何も言えなくなる、ルーク。」

「例え、ルークが死んだとしても、エミリアさんは信じないわ。必ず探すわよ。死んだのは嘘だと自分に言い聞かせて」
「っとソラが続ける。」

だが、ルークは……

「あいつを使えば……エミリアも諦める。」

「まさかっ!!」
「っとソラが声をあげる。」

「そう、あいつを使う」
「っともう一度言うルーク。」

「そんな事したら、カイン兄さんが……それに、何よりお父さん達が許さない。」
「っとソラが怒る。」

「カインが言っていた、俺は兄貴の血で救われた。もし、俺が助からなかったら、俺の体を利用して構わない、っと。何せあいつは俺の血で生きて、そして死んだ。」
「っと元氣なく言うルーク。」

「カイン兄さんの奇病の件ね」っとソラが元氣なく言う。

「僕も、カイン兄さんの体の事について聞いた。承認として……。確かに言ってた。俺が死んだら体を利用していいって」「うつ向きながら言うリオル。

「でも、お父さん達が……」っと言ったソラだが。

「……もう、決めた事だ。父さんも母さんも関係ない……」
っとルークは元氣なく言う。

「……エミリアさんは……どうするの?」っとソラが聞く。

「あいつは、もう一人前だ、俺がいなくてもやっていける」っと答えるルーク。

「……」これ以上なにも聞かないソラだった。

「まずは、髪型を変えないと。」「っと何処かに行くこととするルークに対してソラが言う。

「本当に……良いのね」っとソラが言う。

そしてルークが立ち止まりそして、「こつ言う。

「ルーク・フィレンは、今日で終わり。俺は、ディオ・ルタ・オルテガだ。それと……お兄ちゃんって呼ぶな。」「っと言って歩き出したディオ。いつも通りに言っただけだったが、ソラには分かっていた。顔はいつもの同じだったが、心はとても悲しんでいた。

ソラとリオルから少し離れた所で立ち止まり、ディオは涙を流した。そしてディオは呟いた。

「エミリア……みんな……すまない」っと。

そしてまた歩き出したディオだった。そしてディオは通信機とパンフレットを取り出した。パンフレットはディオンからもらったものであり、実はすみの方にディオンの番号が書いてあった。そしてディオは書いてある番号にかける。

『はい、ディオンです』

「どうも、ルークです」

『……ディオでいいですよ。』

「!?!?」

「なぜそれを？」

『ソラちゃんとリオル君に聞いてないんですか?』

「?????」

『彼女らは、僕達の立ち上げた部隊に入ってるんです』

「なんだって!?!?」

『驚くのも、無理がないと思います。どうぞでしょう。会っ日にちを

縮めましょうか？もちろんあなたの都合に合わせますよ。デイオさん。』

「明日……」

『?????』

「明日の10時に、この店で」

『この店とは、そのパンフレットの店ですか?』

「ああ」

『残念ですが、その店、潰れてますよ。』

「なにっ!?!?」

『僕のお気に入りの店があるんですが、その店にしませんか?』

「わかった。なんという店の名前だ?」

『ラッピーカフェと言う店です。名前は、あれですが結構人気の店なんですよ』

「わかった。ラッピーカフェだな」

『はい、あっ、いい忘れました。ラッピーカフェはパルム大都市のカフェ街の中間辺りです。』

「わかった。」

『それでは、また明日』

「まっけてくれ。」

『はい？何でしょうか？』

「そこで詳しく話してもらっかな」

『貴方も、そのつもりで来てくださいね』

「ああ、わかった」

『それでは、失礼します』

電話が切れ、ディオは通信機とパンフレットをしまい、歩き出した。

次回

第二話：嘘と真実

1 2 悲しい決断（後書き）

次回、第二話：嘘と真実ですが、その前にオリキャラの登場人物の紹介です。

紹介のキャラは

ディオ（ルーク）

ソラ

リオル

ディオオン

ソロ

ミケ です。

謎の5人は名前が5人登場次第書きます。 ちよくちよく謎の5人が登場してきます。 本格的活動はまだしません。

オリキャラ登場人物（前書き）

無駄な所を省いたことにより、ページが極端に少ないです。

ディオ「少ないのは、貴方の発想力がないからでは？」

ソロ「兄貴の名前、ディオ。そして、英雄の名前ディオ。かなり似てるし、発想力のなさが出てる」

ディオとディオは、全然違うよ。マカロンとまころんみたいな。

ミケ「M S P からとりました？」

そ、そんなことはない。

ディオ「……………（目が泳い出ますね）」

ソロ「短いが見てくれ」

あっ、俺のセリフ……………。

オリキャラ登場人物

ディオ・ルタ・オルテガ

種族：ヒューマン

年齢：22歳

タイプ：ブレイバー

一人称：俺

髪色：金髪

服装：

イロハフブキ白×黒

今作の主人公。旧名がルーク・フィレンで今まで、エミリア達に”ルーク”と呼ばれて、いたが。実はその名前は偽名であり、本名は、ディオ・ルタ・オルテガである。ある事件により、偽名のルークで、暮らしていたが、リトルウィングで偽名を使った事を後悔している。とある、ことでリトルウィングを飛び出したことも後悔している。

無理矢理、髪型を変えたり、服装も変えた。今後はディオとして、生きていく事を決める。

ソラ・ミル・オルテガ

種族：ヒューマン

年齢：19歳

タイプ：フォース

一人称：私

髪色：金髪

服装：カグヤヒラリ

ディオの妹。

頬つぺたの上に赤い模様？みたいなものをつけている。元カーディアンズで、兄ディオが失踪したため、わずが3ヶ月で辞める事になった。再会後は、ディオには言っていないが、ディオンの立ち上げた部隊に入っている。

リオル・ルタ・オルテガ

種族：ニューマン

タイプ：ハンター

一人称：僕

髪色：茶髪

年齢：18歳

服装：

パニツシュジャケット

母親の血が多く繋がりに、ヒューマンである兄、姉とは違い、ニューマンとして生まれた。強くなりたかったので、ソラに無理を言っただいオンが立ち上げた部隊に入った。

ディオンのバーデン

種族：ヒューマン

タイプ：?????

一人称：僕

年齢：18～19歳?

髪色：銀髪

イルミナス・コート

ルーク（ディオ）とエミリアが依頼中にあつた青年。常時は笑顔み
たいな優しい顔だが、笑顔で、凄い威圧感を出すことも出来る。自
分の立ち上げた部隊のリーダー。ディオンにも、偽名の名前がある
とかないとか。ある人物を追つてる。

ソロ・レスタ

種族：デューマン

タイプ：ハンター

一人称：俺

年齢：15～16歳

髪色：黒髪

服装：

ブレイブスコートシリーズ（黒×暗い青）

ディオオンが立ち上げた部隊の副リーダー。ディオの前で、自分の強
さを見せてないので、ディオはソロの強さを知らないが、相当のや
り手。ミケに対してかなり厳しい。

ミケ・ラン・ジャータン

種族：ヒューマン

タイプ：ブレイバー

一人称：僕

年齢：10歳

髪色：青髪

服装：

ジャツジメントコート

ディオ（ルーク）とエミリアを襲った張本人。ヒューマンでナノブラストを使える。油断したせいか、ディオ達にやられる。そのあと、無理矢理ディオンに誤らさせられた。何故、ディオ達を襲ったのか、まだディオに言っていない。

オリキャラ登場人物（後書き）

ソロ「なあ、兄貴？これだけで、俺達の事をわかってもらえるか？」

ディオソ「まあ、自分達がこのような人物だと、今後の話で、わかってもらえれば、いいと思いますよ。」

ソロ「じゃ、書く必要なかったんじゃ……」

ディオソ「あるのとないのでは、違いますからね。」

ソロ「確かにな。んっ？作者がいないな？」

ディオソ「彼なら、ディオ君に呼ばれて、出掛けましたよ。」

ソロ「おいおい、……締めはどうするっ？」

ミケ「僕がやるよ。誤字、脱字がありましたら、お願いします。」

第二話：嘘と真実1（前書き）

第二話です。ほとんどが会話になってますが、気にしないでください。

ディオ「確か……この辺のはず……あ、あっちかな」

では、ごうござ

第二話：嘘と真実 1

くパルム大都市・カフェ街く

カフェ街に、ディオがいた。ディオと話をする日になったのだが、ディオは、キヨロキヨロしている。

「確か……、この辺のハズなんだが……」

どうやら、ラッピーカフェを探しているらしい。つとそこへ、

「もう少し行った先の黄色い店ですよ」つと後ろから声がした。振り返ってみると、ディオがいた。どうやら声の主はディオだったようだ。

「あっ、ああ、そうか」つとディオは、答えた。

「ん？あんた1人か？」つとディオがディオに聞く。

「ええ、ソロとミケは、ある調査をしてもらってます。」

「????。ある調査？」

「詳しい話は、店で話します。さて、行きましょう」つとディオは、約束の店である、ラッピーカフェに向かっていった。ディオは

その後を付いていく。

くラッピーカフェく

ガチャ、

『いらっしやいませ！！何名様ですか？』つと定員が答える。

「二名です。」つとディオオンが答える。

『では、こちらのお席になります』つと定員がディオオン達を席に案内する。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

水とおしぼりを持ってきた定員が、

『ご注文が決まりましたらお呼びください』つと定員がディオオン達の席を離れる。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

「なかなかの店だな。」つと感想を言うディオオン。

「それだけではないよ。味もいいんだ」つと答えるディオオン。

ガヤガヤ、ガヤガヤ

「……にしては、少し騒がしいな。」

「あれが、原因だと思うよ」 つとディオオンが指を指す。その先にはモニターがあった。モニターには、グラールチャンネル5がやってきた。どうやらニュースの内容で、ガヤガヤしていたらしい。

『リトルウィングのルーク・フィレン、失踪。今現在、リトルウィングのメンバーがルークの捜索するも、ルークの居場所、確認出来ず。』 つとニュースが流れていた。

「……」

「帰らなくて、いいのかい？」

(少し、会話だけになります)

「ああ、」

「偽装死亡……止めたそうだね。ソラちゃんに聞いたよ」

「ああ、やっぱり、悲しむ人を見たくない」

「あれほど、ルークは死んだ事にするって言ったのに、なんで？」

「……夢を……見たんだ……」

「夢？」

「エミリアの夢だ……俺が偽装死亡したことにより、エミリアが凄い落ち込むんだ。いや、それだけじゃない。俺は、偽装死亡したことにより、エミリアの笑顔を奪ったんだ。それで、エミリアはもう、笑うことはなかった」

「だから、偽装死亡は止めたのかい？」

「偽装死亡をするつと言った自分がバカみたいだ。（ミカに、エミリアを守って、つと言われたのにな）」

「まあ、いいんじゃないかな？そういうのは、夢に限るよ。」

「ああ、そうだな。」

「それより、何か頼も。何飲む？」

「そうだな、カフェオレにしよう」

「じゃあ、僕はホットコーヒーにしよう」

定員を呼んだディオンは、それぞれ注文するやつを頼み来るまで、例の話をする。

「ディオオン、早速話なんだが」

「待って、」つとディオオンが話を止める。

「どうした？」

「ディオオンじゃ、君と被るから……そうだな……ルークにしてくれる?」

「ふざけるな」

「ごめん、ごめん。冗談だよ。ディックつとよんでくれるかい?」

「ディック?」

「僕のもう1つのなまえだよ。ディック・ハリンソン。僕の偽名の名がこれだよ。」

「なぜ、偽名で呼ぶんだよ……」

「だから言ったでしょう?被るからだよ。」

そう、話をしていると、注文した物を持ってきた定員に注文した物を渡され、席から離れる定員。

「つで、まず聞きたいのはあるかい?」つと言つディック。

「あんた達の目的はなんだが」

「目的……か」つとコーヒーを飲みディック。

(会話だけになります)

「実は、僕達は妙な動きをしている5人をおってるんだ」

「妙な5人?」

「君たちが、依頼を受けたのはなんだったかな？」

「怪しい5人の調査。だが、それは元ローグス3人、強盗2人で、それと関係ないぞ？」

「いや、関係あると思うよ。」

「!?!？」

「依頼を受けた、怪しい5人がその5人じゃなかったとしたら・・・」

「!?!?!」

「そう、その依頼は、まだ終わってない」

「ま、まさか」

「しかも、その5人が、僕達の追っている5人の可能性もあると思うんだ。」

「（あの時の、妙な感覚はこれのことか？）」

「まあ、決まったわけじゃ無いけど、その可能性が大だね」

「そいつらの名前を知ってるか？」

「いや、今それを調査をしている所なんだ。ってな、訳で、それ以

外なら、話せるよ。」

「なぜ、その5人を追ってるんだ？」

「……、このグラールを救うため」

「なにっ?」

「彼らは、このグラールを支配する可能性のあるだ。」

「なぜ、わかるんだ? 調査中なんだろう?」

「彼らに、嫌なオーラを感じたんだ。」

「嫌なオーラを?」

「うん、」

「でも、それだけグラールを支配する奴らって決めつけるなど」

「……確かにね。支配だけで終わればいいけどね」

「どっこういうことだ?」

「彼らを調査中つと言っても、全然わかってないって事ではないんだ。」

「じゃ、少しならわかるのか?」

「うん、彼らは一人一人それぞれ違う種族だと言ったこと。彼らに嫌なオーラを感じた事ぐらいだね。」

「でも、それだけで、そいつらを悪者にするのは……」

ピピピピピピ

「あっ、ごめんね」

っと、ディオに謝り、通信に出るディック。

「はい、ディックです」

『……ディックって、なんで偽名使ってただよ兄貴。』

通信相手はソロだった

「ディオ君と似てるからね。だから偽名の方につかっただ。」

『オレとミケは分かるが、他の奴らならどうするんだ。ビックリするぞ』

「ごめん、ごめん、気を付けるよ。っで、わかったのかい。」

『なあ、そこにディオの兄貴がいると……っっているみたいだな。なら丁度いい。ディオ兄貴も聞いてくれ』

「どうかしたのかい？」

っとディックが聞く。

『あの5人。やはり、兄貴の言う通り、このグラールを支配をするつもりが高い。』

「やっぱり、そうだったんだね。」

(話の内容は、ディオとディックにしか、わからないように、通信の前にイヤホンを付けてます。)

「名前は、わかるか？」

「とディオがきく。」

『いや、あいつらなかなか仲間の名前を呼ばない。警戒しているのか、「君、お前、お主、」で読むで。』と答えるソロ。

「そうか。ありがとう」

「とディックが言うが……」

『それともうひとつ』と真剣な顔と言い方でいう(通信機は画面?が写る通信機ってわかるかな?)。

「どうしたんだ?」とディオが聞く。

『さっき、奴らの目的は、グラールの支配って言ったが、どうやらそれはおまけらしい。』と言うソロ。

「何?じゃ、その5人の本当の目的はなんだ。」

『……兄貴には、5人それぞれ違う種族ってのは聞いたか?』

「ああ、聞いたが、それがど……」と言葉が失う。

「もしかして……」
ディックがソロに聞く。

『ああ、間違いない……あいつら種族戦争を起こすつもりだ』

「なんだって」っと声を上げてしまつディオ。その声に、反応しデ
イオに向く、客。

「すみません」っと謝り、小さい声で、ソロに聞く

「ま、間違いないのか？」

『ああ、あいつらそんな話をしていた。……聞き間違いであつ
て欲しい。』っと悔しそうに答えるソロ。

『それに、あいつらの嫌なオーラの意味もわかった』

「なんだい？」っと聞くディック。

『あいつら……転生を使つてる』

「転生だつて？」

っとディックが聞く。

『ああ、間違いない。凄いオーラを感じる。……勝てないオー
ラを……』

「……わかった……ありがとう。もう引き上げてもいいよ」

『わかった。これより帰還する』

少し間があく、すでに2人の飲み物は空だ。

「大変な事になったね」

「ああ」

「……」

「……」

「さてと、話の続けよ……」っと通信前の話をしようとしたが、

「あんた、いいのか！ 種族戦争だぞ。そんな事が起きたら、世界がほろびるんだぞ」 っとディックに怒る。

ディックは

「わかってるよ」なぜか落ち着いてる。

「なぜ、そんな落ち着いていられるんだ。」っと聞くディオ。

「なぜって、あいつらにはまだ、種族戦争どころか、グラールの支配さえ出来ない。」っと答える。

「えっ?」

「考えてみなよ。今のグラール。みんな種族差別なく生活してるで

しょう。まず種族差別をするには、グラールを支配する必要がある。だけど、このグラールには、ガーディアンズ、同盟軍、ローグス、リトルウィング。SEEDを封印した英雄のイーサン・ウエーバー。……そして……。亜空間事件を解決した英雄、ルーク・フィレンこと、ディオ・ルタ・オルテガ。君たちの力が統一すれば大丈夫だよ」つと答えるディック。

「凄い自信だな？」

「自信じゃない……。答えさ。この世に強い絆を持てば、不可能を可能に出来る。君たちのその強い絆を力に変える。それが唯一、グラールを救う事であり、彼らに対抗出来る力。それが絆さ」

「……」つとディックの言葉に言葉が出ないディオ。

「一人で戦うなんて、バカな事を考えない事だね。」

「あいつら、転生してるんだろ？」

「転生してるから、絶対に強くなるとは限らない。転生して、強くなったつと考えると必ず怪我をする。転生しても、かなり努力しないと、強くは慣れない。それに転生しても、必ず強くなる保証はない。逆に弱くなるかもしれない。……。」つと悲しそうに言う。

「？」つと疑問そうにするディオ。

「昔いたんだよ、僕達の部隊に、転生して強くなったつとっていい張って死んだ仲間がね。全くバカなやつだよ。」

「……」

「グラールを救うためにはまず絆を掴まなければならない。今のグラールの絆よりも大きな絆が。彼らに支配されると、絆は簡単には崩される。そうなる前に……」

「そうだな。」

「ところで、エミリアちゃんから通信……来ないね。心配してるはずなのに」

「エミリア達の通信は拒否にしてるからな。」と答えるディオ。

「そっか、」

「……」

「……」

「まずは……、」

「??？」

「あんたの話を聞くのが先だったな？」

「そうだね」「っと店員を呼び。」

「??？」

「コーピーのおかわりください」

「あっ、俺も」

『はい、かしこまりました』 つと店員がディオ達の席を外した。

「それじゃ、話そうか。僕達の絆を深めるために」

第二話：嘘と真実1（後書き）

ディオ「嘘と真実にあまり関係ないな」

なに、これからですよ。まだ1番目だから。

ディック「それは楽しみですな」

でしょう。君となら話が会つかも

ディオ「はあ〜」

ピピピピピピピ

ディオ「??」

通信？

ディック「僕だ」

ピッ

ソロ「誤字、脱字があったら教えてくれ」

第二話：嘘と真実2（前書き）

もう、ほとんどが会話です。

ディック「コーヒーおかわり」

ディオ「俺も、」

ちなみに飲み放題です。セルフサービス出はなく、店員が運ぶ珍しい店です。

店員『それでは、嘘と真実2、御覧下さい。』

第二話：嘘と真実2

（リトルウィング事務所）

「どうだ、見つかったか？・・・わかった。調査を続けてくれ」

ピッ

「はあく、あの馬鹿、何処に、行きやがった。」っとクラウチが腹をたてている。そこへ、

「クラウチ、ルークは見つかったの？」っとウルスラがクラウチに聞く。

「いや、ルークが乗った船なら見つかったんだが、肝心の居場所までは、まだまだそうだ。」右手で自分の頭をかくクラウチ。

「チエルシーは、店に来る客に聞いてるそうなんだけど、今のところ手応えがないみたい」っとウルスラも答えた。

「ナギサの方も数分前に、通信があったんだが、手応えがねえそうだ。」

「そう、何もなければいいけど」

「ところで、・・・エミリアの様子はどうだ？」っとクラウチが

ウルスラに聞く。

「いつもと変わらないわ。」っとウルスラが答えた。

「そうか。ルークがいなくなって、駄目になるかと思ったがなあ。」

「『今度は、あたしがルークを助ける番』っと行って、探しに行つたわ」

「ホント、変わったよな。あいつ。」

「彼のおかげよね。あの子が変われたの」

「ああ、そうだな」

「……」

「んっ?どうした?」

「な、何でもないわ。」

「???」

……数日前

「ルーク、ちょっといいからしら。」

「えっ?あ、はい。なんですか?」

「エミリアの事なんだけど」

「エミリアがどうかしたんですか？」

「別にどうかした分けではないわ。」

「はい？」

「あの子が変われたのは、自分のおかげでだ、って考えたりする？」

「いえ、ただ俺は、エミリアの変わるところをサポートしただけで別に俺が変えたわけでは、ないですよ。．．．なぜそんなことを？」

「前も、エミリアについて話した事、覚える？」

「同じような、話した気がしますね」

「そうね、じゃその後の話した事、覚える？」

「クラウチの家族の話？」

「その前よ」

「．．．．、あなたが、ふとっ彼女の前から消えるんじゃないかって、話ですか？」

「その通りよ」

「……」

「ルーク？」

「大丈夫ですよ。エミリアの前からいなくなったりしませんよ。」

「それを聞いて安心したわ。……いつまでもエミリアを守ってあげてね。1人でいるのは、寂しいと思うし、何よりあなたのパートナーでもあるからさ。」

「任せてください」

「頼もしいわ」

……現在

「（あの時の話が現実になるとは、思わなかったわ。）」

「ウルスラ、大丈夫か？」

「えっ？ええ、大丈夫よ。それより、クラウチ、エミリアからの通信はあったの？」

「いや、まだだ。もう少しだと思う……」

ジュジュジュジュ

「「！！！」」

「も、もしもエミリアか？どうだった……どうしたエミリア？何で泣いてるんだよ？何？ルークを見つけただと？それでなんで泣いてるんだ？………どういう意味だよ、それ………」

……数時間前

くラッピーカフェく

「なるほど、そういうことだったんだ」

「驚くのは、当たり前ですからね」

ディオとディックが雑談をしている。

「ところで、ミケの、『だよね〜』ってのは、なんだ？」とディックに聞く。

「ああ、それ？単なる癖だよ。」と答えるルーク

「癖？」

「たまに、やるんですよ。相手を馬鹿にした言い方。やめなさいっ
と言っても聞かなくて」

「ミケのヒューマンのナノブラストは？」

「転生に失敗したんだ。」

「転生に失敗した？」

「僕達の転生機械はヒューマンはヒューマン、ニューマンはニューマンの専用の転生機械なんだ」

「っで、間違えて、ビーストで転生したわけだ。」

「そういうこと。まさか、成功するとは思わなかったよ。今後こんな事がないように壊したよ。あっ、もう結構時間だったね。もうこの辺にしようか？」

「2ついいか？」

「なんですか？」

「あんだ達の部隊の名前は？」とディックの立ち上げ部隊に、ついで聞く。

「部隊の名前？そつえば言つて無かつたね。僕達の立ち上げた部隊の名前は、【一種族】部隊つて言つんだ。」と答える。

「えっ？い、一種族部隊？なんだよ、それ？」

「もともと僕達は、一種族だったのは、知つてる？ヒューマンによつて、ニューマン、キャスト、ビーストが造られ、そして各各種族の関係が悪化し戦争が起きた。戦争は終わつても、しばらくの間は、種族差別は続いたと思う。デューマンという新たな種族も誕生した。

今は種族差別つと言ったものはないけど、もし、種族差別があったとしたら、種族をなくし、皆が一種族になれば、種族差別もなくなると思うし、戦争も起こらないと思う。そういう意味合いもあって一種族部隊にしたんだ。」つとディックが答えた。

「一種族か……」

「例え一種族になっても差別は続くと思う。僕達は差別つと言ったものを無くしていきたい。種族差別が起きた場合、グラールが滅び、戦争が始まる」

「……」

「そうなる前に、彼らを倒さなければ。」

「そうだな。」

「もう1つ聞きたいことはなんだい？」つとディックが言い、

「あんたも転生してるのか？」つとディオが聞く。

「うん、僕の部隊で転生しているのは、僕と、ソロ、ミケの3人だよ。」つとディックが答えた。

「わかった。」

「そろそろ、話も終わりにしよう。」

「そうだな。」

「何かあったら、連絡するよ。連絡先教えるから。」

「あんたからも連絡しろよ」

「わかってますよ。」

お互いに連絡先を交換する。

「じゃ、失礼します。お金の方は僕が払いますので」

「いいのか？」

「大丈夫ですよ。では、失礼します」つと会計をし、店を出たディック。そして、その後すぐに、ディオも店を出た。

くパルム大都市カフェ街く

ここに1人の少女と1人の少年が歩いていた。何やらぶつぶつ言いながら、歩いている。

「ルーク……どこに行ったの……」

あまり元気のない言葉だった。

「エミリア。大丈夫か？」

つと少年が少女に声をかけた

「えっ？あ、うん、ごめんね、ユート。大丈夫だよ」

エミリアとユート、どうやら少女と少年はこの2人のようだ。

「エミリア、ルークがいなくなつて、元気がないぞ。」とユートが言う。

「だって、ルークがいなくなったの……」

「エミリアのせいじゃないぞー！」とユートが言う。

「えっ？」

「クラウドだって、お前のせいじゃないって言ってるし、ルークだってそんなことを言うはずない」
とユートが言ったのだが

「何で、あんたがルークの思ってることがわかるのよ。」

「匂いでわかる。あいつには、そんなことを言わない匂いが。」

「そんなんでわかるわけないでしょうー！」と怒鳴るエミリア。

「今、気にしてるのは、あたしが、お父さんに嘘を言っとけば、こんな事にはならなかった。それに……あんぐらいで怒って飛び出したルークに怒ってやるんだ。」
とエミリアは言った。

「エミリア、お前なんだかルークみたいだぞ？」

「えっ?」

「エミリアがいなくなった時のルークに少し似てる。」

「でも、ルークみたいに強くなれない。」

「エミリアもずいぶん強いぞ。」

「うっん、あたしは強くないよ、お父さん達が心配しない様に、強くみせてるだけ……」と話していたエミリアだが

「この匂い……」

「えっ?」

「この匂い……ルークの匂いだ」っと走り出すユート。

「えっ? ちょ、ちょっと待ってよユート。」ユートを追いかける、エミリア。

「あそこだ。あそこにいるぞ」っとユート

「はあ、はあ、ルーク!」っとエミリアが呼ぶ。

……しかし

「……」ルークと呼ばれた青年は無視して歩く。ルークと呼ばれた青年……そう、エミリアのパートナー、ディオ(ルーク)だった。

「ちょ、ちょっと、ルーク!」っと言ったエミリアだが

また、無視して歩くディオ（ルーク）

「お前！！」っとユートが走ってディオの腕を掴む。

そして、

「お前ら……だれた？」っと言ったディオ（ルーク）に驚く2人

「誰って、何言ってるの？ルーク。」っと言ったエミリアは、泣き
そんな声で言う。

「ルーク？悪いが人違いだ。俺の名前はルークじゃない」っと言い
ユートの手を自分の腕から優しく離させる。

「あんな、何言ってるの！！もしかして、まだ怒ってるの！！？」
エミリアの目から涙がててきた。

しかし、ディオは

「あんなもしつこい人だな、俺はルークじゃないっていつてんだろ
！！」っと怒鳴るディオ（ルーク）。

「ルーク……」

「まったく、」っと言い歩き出すディオ。そして惑星移動の大型船
（電車みたいな乗り物）に乗るディオ。

「ルーク！！」っとエミリアが走り、今度はエミリアがディオの腕
を掴む。

「いい加減にしろ!!」っとおもいつきりエミリアの手を離す。

「!!!!」っと驚くエミリアを無視して船に乗るディオ。そして船は飛び立っていった。

「ルーク……」っと膝を地面に付け、顔を手でおさえ、泣くエミリア。

「エミリア……」ユートはエミリアに言葉をかけようとしたが、やめた。こういう時、なんと声をかけたらよいのかわからなかつたのである。

つとその時、

エミリアがクラウドに通信をした。

「もしもし、お父さん。」

『も、もしもしエミリアか? どうだ? ……どうしたエミリア? 何で泣いてるんだよ?』

「実は、ルークを見つけたの。」

『何? ルークを見つけただと? それでなんで泣いてるんだ?』

「もう、ルークは……ルークじゃない。あたしの知ってるルークは……もう、何処にもいない!!」

『………どういう意味だよ、それ………』

く
く
く

『……わかった、お前ら、とりあえず、戻ってこい。』

「わかった」

「大丈夫か？エミリア」っとユートがエミリアに聞く。

「うん、大丈夫。とりあえず帰る。」っとエミリアとユートは船に向かつて行った。

その光景を見ていたディックが。

「本当に、よかったですか？ディオ君」っと呟いた。

第二話：嘘と真実2（後書き）

まだまだ嘘と真実は……

ユート「お前がエミリアを泣かしたな!!」

な、泣かしたのはルーク（ディオ）で

ユート「ルークがエミリアを泣かすわけがない」

ちよ、ちよっと、待てユート話を……ぎゃ〜

エミリア「……」

ディック「誤字、脱字がありましたら、教えて下さい（ぼそぼそ）」

第二話・嘘と真実3（前書き）

もう、ほとんどが、会話になっています。

第二話・嘘と真実3

「モトブウ・カジノシティ」

「……………」

「わいわい、

「……………」

「がやがや

「どうやら、船を間違えたな。」
「つとディオは右手を顔に当てた。」

「ま、せっかく、カジノに来たし、少しだけやるのかな？」
「つと考えていると。」

「ルーク……………さん？」
「つと声がした。」

不意に、偽名の名前を呼ばれたので、ディオは振り返ってしまった。

あっ、っと思っただが、すでに遅かった。

「やっぱり、ルークさん!! どうして、こんな所に? リトルウィングからいなくなったって、エミリアから搜索の手伝いをしての通信がありましたよ!!」声をかけた人物。それは、ガーディアンズのルミアだった。

「お、俺はルークって名前じゃない。」っと思っただが……。

「では、何で振り返ったんですか?」

「う、後ろから、声をかけられたら、普通振り向くだろ?」っと思っただが、

「知らない方の名前だったら、普通、振り返りませんよ。」っと思っただが、

「……」何も言えなくなってしまった。

「ルークさん?」っと思っただが、

「仕方ない、……久しぶりだな。ルミア。元気だっ……」
だったか、っと思っただが、

「ルークさん！それよりも何で、リトルウィングを飛び出し、失踪をなんてしたんですか？それよりも、何で、ここに？」

「君こそ、何で、ここに？君が来るような場所じゃないぞ」

「ルークさんも同じですよ。ルークさんもこのような場所に来るような所じゃありません」

「話せば長くなる。……すべて話せないが、話せる所まで話させてくれ。」っと言うディオ。

「わかりました」っとルミアは答えた。

「立ち話もあれだし、あの店で話すよ。」っとその店に歩いていくディオ。そのあとをルミアがついていく。

101

く喫茶店

数分後

「そういう事だったんですか。」っとルミアが言った。

言った内容は、自分の名前についてだけ。まだ怪しい5人の話をし

ない。まだ正しいと決まった分けではないし、かえって混乱するの
で、自分の名前だけ話した。

「じゃ、これからディオさんって呼べばいいんですね」

「ああ、頼む。あと、エミリア達やガーディアンズの他の連中には
秘密にしてくれないか？」

「わかりました。その代わり……」とルミア。

「その代わり？」と聞くディオ。

「何か奢って下さい。」
とルミアが言う。

「奢るだけで、いいのか？」と笑いながらディオが言う。

「はい、もちろん高いのを食べますよ。」と答えたルミア。

「秘密にしてくれるなら、それぐらい構わない。」と言うルーク。

（モトブウ、カジノシティ）

「ところでルミア？」「ディオがルミアに質問する。

「なんですか？」

「さっきも言ったけど、何で、君がここに？」
「どうやら、会ったときの話のようだ。」

「ああ、それですか？実は他の任務で来てたんです。」

「他の任務？」

「カジノで悪質な手を使い、メセタを儲けてる犯人を捕まえに来たんです。犯人を捕まえた後に、あなたにあったんです。」

「そうだったんだ。」

「ルー……ディオさんは何で、ここに？」
「ルークって言いかけた、ルミア。」

「……船を間違えた」

「えっ？船を？」

「ああ、」

「ふっふっふ、」
「っとルミアが笑う。」

「な、何がおかしい？」

「ディオも笑いながら聞く」

「あなたもそんなミスをするんだなって」

「俺も、1人の人間だよ。失敗したりする」

「……リトルウィングを抜け出したのは「っと少し小さめな声で聞くルミア。」

「……さあ、俺も、わからない。」

「……」

「……」

「ディオさん……」

「何だ？」

「いなくならないで下さい（小声）」

「えっ？」

「何でもありません。それでは、失礼します」

「ああ、」

つとルミアは走って立ち去っていった。先に行かせたガーディアンズを待たせているのだろう。

「さあ、俺も、行くか。」っとディオもこの場を離れた。

く?????

? 「……………」

? 3 「……………」

? 2 「君たちその辺にしなよ。」

? 4 「そ、そうッスよ。今はもめてる場合じゃないッスよ。」

? 「……………ちっ」

? 3 「ふん、今日は勘弁してやる」

? 「今、戦っても、いいんだぞ?」

? 3 「面白い、相手になつてやる」

? 5 「よさねえか、お前ら。喧嘩ならどこか行ってやれ」

? 2 「だから、今はもめてる場合じゃないって。」

? 4 「みんな、仲良くいくッスよ」

? 「……………」

? 3 「……………」

? 4 「さあ、握手ツスよ、握手。」

? 3 「……………」

ト
ト
ト

? 2 「あ、ちょっと待ってよ」

? 4 「何で、仲良くできないツスかね」

? 5 「さあな。」

? 「（人形め、俺の考えた計画をバカにしやがって）」

? 4 「何やってるんツスか？置いていくツスよ」

? 「（まあいい。あの馬鹿を殺して、違うやつを呼ぶか。どうせ、代わりは、たくさんある。）」

? 「バリン、ちょっといいか。」

バリン（? 3） 「なんだよ」

? 「お前ら、先にいってくれ」

? 2 「わかりました」

? 4 「早く来てくださいッスよ」

バリン「なんだよ、用っ……」

グサツ

バリン「!!!!」

バシユツ

バリン「!!!!き、きさ……」

グサツ、バシユツ、グサツ、バシユツ、グサツ

バリン「や……め」

? 「消える。」

ドーーーーーン!!

? 「……」

？」（所詮、人形は人形か。）」

ピッ、ピッ、ピッ

？「俺だ、バリンが死んだ。早急に代わりをよこせ。今度はゴミを寄越すな。きちんとしたやつをよこせ。じゃな。」

？「やつ（人形）の代わりが来るまで、どうしようかな？……ルークとやらと、遊ぶか。いずれ戦うはめに合う。先に殺しておくか。奴らが奴を失えば、こっちのもんだ。」

ゾクッ、

「……な、なんだ、この感覚は……」

（一 種 族 部 隊 ・ 拠 点）

「ディオの兄貴に俺達の事を？」

『嘘、偽りなく、正直に話したよ。彼も疑わなかったよ。』

「そうか、それは、よかった。話がわかる奴で。」

『本当、よかったよ。やっぱり真実を言うのは気持ちいいね』

「兄貴は真実がほとんどだし、嘘はあまり言わないもんな。」

『……嘘は、そのうちバレ、その人からみんな離れていく。嘘はたった1つで絆を切らしてしまう可能性があるんだ……』

「兄貴？」

『（ディオ君、偽りは……ほどほどに頼むよ……。君が必要なのは、僕達じゃない。リトルウィングの皆さんだよ）』

第二話：嘘と真実（終）

第二話：嘘と真実 3（後書き）

第二話：嘘と真実終了です。

謎の5人の1人が死にましたね。今は4人ですが、また5人になります。

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

2 1 行動開始（前書き）

第三話はもう少ししてからです。

ついに謎の5人の1人が行動開始。

どうぞ、ご覧ください。

2 1 行動開始

く???.???

ここに、2人の人がいた。何もなく、来ても意味のない場所。そして、

? 「今日からお前は、俺達の仲間だ」

? 3 「バリンさんの代わりに、頑張ります。」

? 「バリンの代わりにしなくていい、自分の力で頑張ってくれ。」

? 3 「わかりました」

? 「敬語は使わなくていいぞ。さてと、あいつらの所に行くんだが、俺は用事がある。先に行ってくれ、場所はここだ。」

? 3 「了解!!」

? 「また、後でな。」

くパルム大都市く

ここに、1人の青年がいた。惑星移動船（バスみたいな感じ）を間違えたので、パルムに戻って来たディオ。しかし、

「うーん、自室に忘れ物をした。」

「船はないし、taxi船に乗って、いやいや、ならクラッド6行きのbus船に乗るか、人ゴミに隠れて行った方がいいかも。依頼最近多いから大丈夫だろ……。多分」っと心配したが、とりあえずリトルウィングに帰ることにしたディオ。そして、クラッド6行きのbus船に乗った。

くリトルウィング・ロビーく

「（やっぱり、人が多いな）」

リトルウィングに着いたディオ。そして、

「（ここでバレたら一巻の終わり、気を付けて進もう）」回りの目を気にしながら、自室に向かうディオ。そして、

「（やべ、バスクだ!!!）」　　っと思わず、顔を反らす。

「んっ？」

「（き、気付かれたか？）」

「お前、」

「（終わった……）」

「こっちは、我々の家だぞ。^{マイルーム}事務所はあっちだ。」と事務所を指を指す。

「（あぶね〜）……コクリ」^{と頷き、事務所を向かい振りをして、バスクが何処かに行ったのを確認すると、急いでマイルームに向かった。}

「あぶね、バレる所だった。とりあえず……大丈夫……だよな」^{つと不安はするが}

「とつとと、済まして帰る」

（ルーク・マイルーム）

プシュー

「（よかった、開いたよ）」

自分のカギで開くか心配をしていた。何しろリトルウィングを飛び出してカギを変えたか心配をしたからだ。

「（俺がいつでも帰って来てもいいように、ってことか？）」「っと考えた。ルークのパートナーマシナリー（以後PM）は調整中だ。

「さつさと、持って帰る。」「っと奥に進む……。だが

ゴト、

「！！？（誰だ？）」「っとディオは慎重に音をたてずに歩きそして音をした方へ顔を覗かせる。

？「待ってたぜ、ルーク」

「！！？誰だ」

？「失踪したのに、ここにまさか帰って来るとは、勘を頼るものだ。」

「質問に答える！！」
っとディオが言う。

？「口がわりいくなあ。もう少し利口なしゃべり方をしろよ」「っとばかにした言い方で言う。

「お前も一緒だろ？」

？「俺はそんなに口は悪くない。」

「そんなことはいい、質問に答えろ！！」

？「声、出してもいいの？お前が帰って来たことがバレるぞ。」

「答えろって言うてるんだ。」

「仕方ない、俺の名前は、ルーティン。ルーティン、インガム。みての通りヒューマンだ」つと言うルーティン。

「偽名か？」つとディオ

「お前とは、違う。俺は偽らないからな。」

「！！！？なぜそれを？」

「教える、必要はない。どうせ死ぬんだ。ここで」

「俺をあまりなめない方がいいぞ。」つとシップウジンライを構える。

「やれやれ、こんな場所で戦うなんて・・・ま、いいか、どこで戦っても死ぬんだから。」つとルーティン

「なめるなって言うてるんだよ。」つとディオ。

「じゃ、戦ってみるか？もう、結果は分かるけど・・・」つと

い、武器を構える。

「なめるな!!」っとルーティンに襲い掛かる。しかし、

カッキ〜ン

「ツツ!!」

「やるな」

手を上下に振る。どうやら手が痺れたらしい。

そして、少し離れるディオ。ルーティンが持っていたのは、

「なんだ、その武器?」

「これか?武器屋のオヤジに頼んで作ってもらった。その名も”ブラックソード”だ。」

「名前にセンスがねえな」

「はっはっはっは、名前より、その武器の効果さ」

「なに?」

「この武器は、相手の力を二倍を利用する武器だ。」

「なに?」

「分かりやすく言うと、お前の攻撃して、俺がお前の攻撃を受け止

めたでしょう。その受け止める威力の二倍＋俺の威力。更に攻撃の威力は、受け止めた威力の二倍＋俺の威力、つまりだ、お前の威力を二倍して利用をさせてもらうって事だ。」

「そんな技術、聞いた事はない」

「そりゃそつさ、俺はこの世界の人間じゃねえからな。」

「なんだと?」

「この宇宙に、あの3つの惑星だけではない。あの3つの他にも惑星がある。宇宙は広いからな。それに、この世界の技術は……ゴミだ。」

「なんだと。」

「こんな技術じゃ、俺には勝てない。俺の世界の技術は、これ以上……いや、はるかに上だ。それに、グラール1位、2位の頭脳を持つ……えっと、エリアンだったか、リリアンだかわからねえが、俺の世界じゃ……クソだ。」

プチッ

ディオの方で何かがキレる音がした。

「てめえ……調子に乗るな!!俺をコケにしようとバカにしようとか構わねえが、仲間をバカにするな。エリアン?リリアン?相手が

の名前はエミリアだ!！」

「そうそう、その名前。あの頭脳じゃもっと努力が必要だ」

「もついい、貴様をここで殺す!！」

「面白い。来いよ。実力の差を見せてやる」

「俺をなめるな!！」

（リトルウィング事務所）

「帰ったか。」っとクラウチがエミリアが事務所に入って来たのに気が付いた。ユートは修行をするって事で、村に送って帰った。

「……」エミリアはなににも言わない。

「大丈夫か?」っとクラウチが聞く。

コクリツ っとエミリアが頷く。クラウチはこれ以上聞かなかった。そこへ

ブシュー

「帰ったぞ」っとデューマンの女性が入ってきた。

「ナギサか？どうだ？何か情報が手に入ったか？」っとクラウチがナギサに聞く。

「貴方に、通信で伝えた通りだ。」っとナギサは答えた。

「そうか……。」

「それより、エミリアはどうした？元気が内容だが？」っとナギサが言う。

「ああ……。」っとクラウチが言おうとしたが、しかし、

「実はね……。」っとエミリアが言った。

「エミリア」っとクラウチが言う。

「くよくよしても仕方ないもん。もう……過ぎた事だし……」

「?」

「ナギサ……実はね……。」っとエミリアが言おうとしたが、

ドタドタ、ドタドタ、

プシュー、

「「「「「！！！！」」」」」

あちこちに、血が飛び散っていており、部屋は散らかり、壁にはキズや穴が空いている。さらにルーク（ディオですが、しばらく、ルークになります）の体に無数の傷が付いていた。

「ルーク！！」 エミリアが呼んだが、返事はない。

「ルーク！！」

エミリアがルークに近寄り、身体を起こすが、

「エミリア！！あまり触るな！！」 っとクラウチが言う。

「だって、だって」 エミリアは涙を流している。

「クラウチ、とりあえず、ベッドに寝かせましょう。」

「わかった、チェルシー、事務所から医療用バックを持ってこい。
ナギサは医者を呼べ」

「わかった」

「了解ネ」

2人が部屋を出る。

っとそこへ、

プシュー

「兄貴、遅かったみたいだぞ。」

「うん、彼らもついに動き出したみたいだね。」

「兄さん、それより早く応急措置をしないと」

「そうだね、医療用バツクは持って来た？」

「ここにあるぜ。兄貴」

つと会話をしているのはディック、ソロ、ミケの3人だった。

「なんだ、てめえら。うちの社員じゃねえな。」つとクラウチが言った。

しかし、クラウチの話を無視し、応急措置をするディック。そして、

「よし、とりあえず応急措置は済んだ。病院に連れて行こう。」

「おい、入って来い。」の声の後に、ビーストの2人が入って来た。

「てめえら、無視すんな。」つと怒鳴るクラウチ。

「話してる暇はない。」つとソロが言う。

「ルークをどうするつもりだ。」

「どうするって、病院に連れて行くに決まってるじゃん」っとミケが言う。

「今は、ほんの応急措置をただけ。早くしないと、死ぬよ。」っとディック。

「てめえらを信用できるか。」っとクラウチ。

「早く行こうぜ兄貴。じゃないと本当に危ないぜ」

「そうだね。」っとルークを担架に乗せ、ビーストの2人が運び扉向かう。

そこへ、エミリアが扉の前に立ち塞がった。

2 1 行動開始（後書き）

次回は第三話・・・ではありません。

誤字、脱字がありましたら教えてください。

2 2大切な人（前書き）

2 1の続きです。内容は自信がないです。

今回はディックの秘密も少し、明らかになります。

では、どうぞ。

2 2 大切な人

「何の真似かな？」っとディック達が出ようとした、扉に立ち塞がるエミリアに言った。

「ルークをベッドに寝かせて」

「悪いけど、それは、無理な願いだね」っと言い、エミリアをどけ、ディック達は、ルークの部屋を出る。

しかし、エミリアは部屋を出た、ディック達の前に立つ。手にはクラリタ・ヴィサス？を持っている。

「ルークをベッドに寝かせてって、言ってるの。」っとエミリア。

「手遅れになるぞ、」っとソロが言う。

「あんた達が連れていくなら、あたし達が連れていく。」

「何でだい？」

「.....」

「君は僕達を知ってるはずだ。」

「信用してないからよ。」

「じゃ、信用しないままでいいよ。でも、病院に連れていく」っと歩き出す。

「勝手なまねはさせない。」医者呼びに行ったナギサがディック達の前に立っていた。愛用の武器、ステイルハーツ？を持っている。

「ルークを置いていけ。」クラウチ、ウルスラ、がそれぞれ武器を構える。

「……じゃ、無理でも通ろつか？」っとミケがゼロセイバーを構える。

「そうだな、仕方がないが」
っとソロがラヴィスⅡカノンを構える。

「争ってる場合じゃないって」っとディック。

「だが、兄貴」っとソロ

「何をもめてる」っとナギサが攻撃を仕掛ける。

だが、ナギサの攻撃が防がれた。

ディックの武器によって、

「仕方がない……」

ディックの目の色が変わる（茶 赤）

「目の色が変わった」っとエミリアが言った。

変わったのは、目の色だけじゃなかった。ディックの身体の回りに怪しいオーラが纏ってる。

「俺も、こうなっては仕方なねえ。お前達との絆は諦める」っとディック。

「何……あいつの黒いオーラは……」っとエミリアが言った。

「油断するな、エミリア。!!」っとクラウチが言う。

「油断も何も、お前達は俺には勝てないぞ」っとディックが笑いながら言う。

「私達をなめない方がいい」っとナギサがスティールハーツ?を構え直す。

「それは面白い、相手になつてやる(君たちとは、戦いたくなかった。でも、ディオ君を助ける方が先だから……ディオ君すまない)」っとディックがディオス・デスペルタルを構える。

そして、

「なにを……争つ……てる」っと声がした。その方向へみんなが向く。

「おい、よせ」

「じっとしてろ」っとのビーストの二人が言う。

だが、ルーク（ディオ）は
担架から降りる……いや、落ちる。

「ルーク！」「エミリアがルークに近寄る。

「エミ……リア」っと力無く言う。

「ルーク……動くな」ナギサも近寄る。

「大……丈夫……だ」

「どう見たって、大丈夫に見えないよ」っとエミリアが言う。

ルークがよろよろになりながらエミリア肩を借りて立つ。だが、立ち上がる力が無いのか、倒れるルーク。

「ルーク！！」っとエミリアが近寄る。

「ゴホッ、ゴホッ！！」っと口から血を吐くルーク。そして、また、エミリアの肩を借り、立ち上がる。

「ルーク、無茶しないで！！」

「大……丈夫だ……、それ……より」ルークがヒヤッカリヨウランをディックに構える。

「その傷でよく立てるな」っとディックが言う。

「それ……が……転……生の……力……か？」
っとフラフラになりながらに立っているルークが力無く言う。

「そうだ、闇の転生って言って、闇を力にする転生……普通の人間では、制御が出来ない。お前なら制御出来るかどうかだが……」

「興……味……ない。」とルークが答える。

「まっ、どうでもいいけど、まずは、お前の傷を手当てしなければ」とディック。

「お……前ら……の転……生……って……言葉……も変わ……るん……だな。」とルークが言う。

「二重人格って思えばいい別に気にならねえよ」とディックが答える。

「デイ……ルークさん、早く僕達の船に乗ってください」とミケが言う……しかし、

「悪……い……が……」

「バタッ!!」

ルークが倒れる。

「ルーク!!」っとエミリアが近寄る。

「大……丈夫」っと答えるルーク。

「早くルークの兄貴を連れて行くつぜ、兄貴」　　つとソロが言う。
しかし、

「いや、このまま帰るぞ。」　　つとディックがいい、医療用バックを
置き、立ち去る。

「兄貴!!」「兄さん!!」「ディック様!!」「つとソロ、ミ
ケ、ビーストの2人がディックの言葉に驚く。

「これで、ルークを治せ。」　　医療用バックを指すディック。

「いいのか？兄貴」　　つとソロが聞く。

「どうせ、コイツらは、ルークを連れて行かれるのは、いやみたい
だしな」

「当たり前よ。コイツは・・・ルークは、あかし達の大切な家族
でもあり、あたしのパートナーなんだから!!」　　つと答えるエミリ
ア。

「エミ・・・リア？」　　つと力無く言うルーク。

「あなたには、助けられてばかりだ。だから、今助けなければ助け
られなくなる」　　つとナギサ。

「何・・・か、俺・・・が死・・・ぬみ・・・たい・・・
だ・・・な。」　　つと笑いながら言うルーク。

「お前のような、バカで面倒な奴がいないと盛り上がらないしな。」

つとクラウチ笑いながら言う。

「本当ね。」つとウルスラも笑いながら言う。

「お．．．い．．．お．．．い．．。」つとルークが言う。

そして、医療用バックを持って来ていたチエルシーが

「本当ヨ。アナタハ、最近、心配ばかりだかけてるモンネ。」
つとチエルシーが言う。

「そ、．．．そう．．．か？」

「本当よ。」つとエミリア

「まっただ」つとナギサ。

「それより、ルークをベッドに移動するぞ」つとルークの肩を貸す。

ナギサもルークの肩を貸す。

「すま．．．ない．．．、ナギ．．．サ．．．クラ．．．
ウチ．．．」つと肩を借りたルークだが、ルークが前に倒れかけ
る。 つとそこへ、

「大丈夫？」つとエミリアが前からルークを支える。

「すま．．．ない、エミ．．．リア」つとルークは言って、エ
ミリア達と自分の部屋に入り、ベッドに寝る。そして、そのまま寝

息をたてる。

「帰るぞ。」っとディックが言う。

「本当にいいのか？兄貴？」っとソロが言う。

「あいつとの絆を切るわけには、いかない……。ここは一旦帰るぞ」っとその場を離れるディックにクラウチが……

「ちょっと待て」

「なんだ？」っとディック

「てめえらは、何者だ？」っとクラウチが聞くが。

「ルークから聞け。」っと言ってその場を去るディック、ソロ、ミケ、ビーストの2人。

「待て、話はまだ……」っとナギサが何か言おうとしたが、

「分かったわ」っとエミリアが言う。

「エ、エミリア！？」っとクラウチが驚く。

「答えてくれるか、分からないけど、それに……」

「それに何だよ。」っとディックが言う。

「ルークの怪我也治した。とりあえず、あんた達を信じる」っとエミリア。

「あつそ、ま、詳しい事はルークから聞きな。もしらしたら、また、来るかもな。」っといい、ミケの肩に触る。

「頼んだ、ミケ」

「ハイハイ、任せて」っと何か咳くそして、

「くくくく!!!?」「くくく」

「消えた!!」ナギサが言う。

エミリアも最初は驚いたが、ミケの特殊能力の事を聞いたので、そんなには驚かなかった。

「ちっ、いろいろ聞きたかったが、しかねえな。」

「お父さん・・・あたし・・・ルークの看病しちゃだめ?」っとエミリアがクラウチに聞く。

「・・・何でだ?」っとクラウチが聞く。

「ルークに助けられてばかりだし、それになりより・・・あたしの大切なパートナーだから。ルークがいたから、あたしは変わった。だから、守ってあげたいの。今度はあたしがルークを守る。」っとエミリアが真剣な目で言った。

「・・・」

「お父さん」

「何言っても聞かねえだろが、お前はよ」っと右手で頭をかきながら言う、クラウチ。

「じゃ、私もルークを守るぞ。」っとナギサが言う。

「分かった、分かった」
っとクラウチが答える。

~~~~~

「ルークが見つかった事だし、捜索の方は終了するようにと社員に伝えとく。」

「ええ、そうね。しかし、エミリア達、ルークの為に良く真剣に探したわね。」っとウルスラが言う。

「そうネ。ルークのためとはいえ、チョットネ。」っと顔が笑ってるチエルシーが言う。

「あら？チエルシーも？実はわたしもよ。」ウルスラも顔が笑ってる。。

「どついう意味だ？」っとクラウチ。

「そついつ意味よ」

く????????

ここに1人の青年がいた。服はぼろぼろで、服は血だらけ、頬には傷痕がある。しかし、服の血は自分の血ではない。その青年の正体……ルーティンだった。

「……」

「（あんな、武器で俺に傷を負わすなんて……ディオ……。まあ、ディオを殺すのは失敗だが、もう1つの目的は達成した。……しかし、今回は疲れた。少し休んだら探るか。素材となる……人間を）」と休む場所を探すために、ホテルを探すルーティンだったが、

「おっと」つとふらつくルーティン。

「（ここまで、俺を追い込むとは、ディオのやつ、あの力をどこで……やはり、あいつの……）」つと考えながら、姿を消した。

## 2 2 大切な人（後書き）

第三話はまだ先です。

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

っていうか、今年はおわりか、今度の投稿は、来年ですね。

ソロ「っとか言って、投稿をサボるなよ」

うん、大丈夫

ミケ「サボる前に、見る人いないんじゃない？」

えっ？そ、そんなことない。っと思う。

ディック「来年もよろしく。」



## 2 3 ルーティン・インガム & ルークの怪我

ルーティン・インガム

種族：?????（見た目はヒューマン）

年齢：21歳

タイプ：アサシン（ブラック惑星のタイプ）

髪色：銀髪

一人称：俺

服装：闇のフード（ブラック惑星の服）

謎の5人の1人。ブラック惑星でも一位、二位ぐらいの強者。いくつかの惑星の強者を倒し、惑星を滅ぼしてきた。だが、ブラック惑星では、それを英雄扱いを受けている。グラールで戦ったルークに初めて傷をつけられるがルークには勝つ。ルークを止めを刺そうとしたが、ルークの反撃をくらい、失敗に終わり、やむを得ずその場から離れる。今は、単独行動をしている。何をたくらんでるかは、ルーティンの仲間でも不明。

～五ヶ月前

（欠片事件から一ヶ月後）

～惑星ゼロ～

ここに2人の青年がいた。1人の青年は武器を持っている。もう1人の青年は地面に倒れている。

ズバツ、ブスツ、バサツ、

ドツカ〜ン、

「ふん、この惑星の1位、2位程の実力者って言うから、張り合いがあると思ったが・・・雑魚だな」っと持っていた武器をしまう。

「しかも、研究も使えないゴミばかり・・・。やはり、俺達の惑星の研究が一番だ。」っという青年。

っとそこに・・・

ピピピピピピ

無線に出る青年。

『ルーティン、どうだ』

「実力者って名乗る連中を倒した。片手だけでも、倒せるゴミだったけどな」

『そうか、よくやった』

「後は、ゴミ共の掃除は頼む。」

『分かった、今から出発する。』

「じゃ、俺は帰させてもらっつ

『今、迎えをよこす』

「いや、いい。」

『瞬間移動でか？』

「ああ、俺のは、距離関係なく使えるからな」

つとルーティンが瞬間移動を使い消えた。

〈惑星・ブラック 大都市〉

「てめえ、金出せ！！」

「ゆ、許して下さい」

「お前が俺にぶつかったから、怪我したんだよ、だから金出せよ！  
！」つと不良は武器を向ける。

「は、はい。すみません」っと青年は金を出す。

「全部出せ!」

「っともつと金を出すよに言っつ。」

「もう、ありません」

その光景を見ていたルーティン。だが、無視をし、先に進む。

「（弱いからいけないんだ。ここでは強いものが勝つ。）」っと自分の家に着いたらルーティンは自分の家に入ってしまった。

一ヶ月前

（欠片事件から五ヶ月後）

（ルーティンの家）

仕事終わり自分の家に帰ってきたルーティン。ソファアーによこになる。っとそこに……。

「ピュピュピュピュ」

「（つるせえなあ）」

ピッ、

通信には出ずに、通信を切る。

ピッピッピッピッ

「(はあ〜)」

ピッ

『おい、ルーティン!!何で通信を切るんだよ!!!』

「うるせえからだよ。今帰ったばかりだからだよ。」

『だからと言って切るな!!!』

「っで、何だよ。」

『今度のお前の行く惑星が見つかったぞ。』

「またかよ、他のやつらに、行かせるよ」

『いや、お前に行かせると、「あの人」からの命令だ』

「『あの人』から?なぜだ?」

『さあな、後、ついに、お前が言っていたやつができたみたいだぞ』

「そうか。じゃ、その惑星で試すか。」

『そうしてくれ』

「っでその惑星は？」

『どっぢやらっつあるらしい』

「ここから近くにあるのか？」

『ここから離れているが、その3つの惑星は、1つ、1つわりと近くに  
あるらしい』

「でも、3つとなると面倒だな」

『どっやるかは、あんたの知恵次第だ』

「分かった。つま、実験には、ちょうどいい」

『じゃ、頼んだぞ。場所はここだ。』

「分かった」

場所を聞いたルーティンは、通信を切る。

「その惑星は、張り合いのある奴はいるのか。つま、いなくても、  
実験にはちょうどいいのは、確かかもな」つと家を出て、瞬間移動  
を使う。

く惑星パルムく

「（何だ？この惑星の連中は？変わったやつが多いな。」

「（耳が尖ったやつに、耳が変わった形のやつ。機械のやつに、肌が白いやつ。何だ？こいつらは）」  
ピピピピピピピ

ピ

『ルーティン、どうだ？この人間共は？』

「変わった連中が多い。俺達とは違う。なんて言えばいいんだ？変わり者が多いな。」

『それじゃわかんねえよ』

「そうか、じゃ写真を送る」

『……、確かに変わった連中だな』

「惑星も多い、排除するには時間が掛かりすぎる」

『……』

「情報を集める。この3つ惑星を調べる。分かったら連絡する」

『分かった』

ピッ、

くパルム・大都市 図書館く

「（なるほど……、この惑星には、五種族の種族があるのか。）  
「ルーティンが本を読んでいる。」

「（ヒューマン、俺と同じだな。」

ペラ、

「（ん？これは……）」  
「（なるほど、五百年戦争……四種族が戦争か。今度は五種族の戦争……これは使えるな）」

ピッ、

「ルーティンだ。どうだ？」

『あなたの相変わらずの少ない情報通りに造ってるが（情報伝達済み）、時間がかかるな。初めての事だからな。だが、安心しろ。完成させるからよ』

「頼んだ。」

『ん？ちょっと待った』

「どうした？」

『どうやら、完成したらしい』

「（時間が掛かるっていったのに……、どっいつ頭脳を持っているんだ？うちの惑星の研究者共は。）」

『今、そっちに行くように言っておく』

「分かった。」

「（奴らの滅ぼすには、そいつらの力が必要だからな）」と本を元にあった場所にしまう。

そして本を戻した場所に置いた時、不意に隣の本に目がいく。

「（ん？）」

ペラッ、

「……、」

真剣に読む

「……、」

真剣に読む

「……………!!」

内容に驚く。

「ふっ、」

っと小さく笑い、その本を戻した。

「（もう、勝ったもんだ……この惑星も対したことない）  
っと図書館を出るルーティン。」

「いや、この惑星は、他の惑星とは違う。」

「倒さなければならない、奴らが多いから、少しは楽しめそうだ……」  
っと図書館を出たルーティン。そして、人の目が行かない所で姿を消した。

（ルーティンが姿を消した数日後）

「早く、早く、早く、早く。」

「遅いと置いておくぞ。」

「あんな、俺たくさん荷物を持つてるんだぞ……」「っと言いなから2人の女性に付いていくルーク。

「あつ、あつちの店も行くよナギサ。」

「そうだな。」

「エミリア、ナギサ、いい加減帰らないか？」っと言ったが無視をし、店に入っていくエミリアとナギサ。

「はあ〜」ため息をついたルークがエミリア達の後に続く……が、

きや〜〜、

うわあ〜、

助けて〜、

「!!!!」っ大悲鳴がした方向に振り向くルーク。

「な、何？今の悲鳴」っと焦るエミリア。

「隣の店から、聞こえたぞ」

っとな隣の店に指を指すナギサ。

っとなその時

「……ル、ルーク……」っとエミリアが叫んだ。

ルークが悲鳴の聞こえた店に向かって入っていった。

「ま、待て、ルーク」その後を追うナギサ。

「ちよっ、ちよっとナギサ!?」っとエミリアも後を追う。

~~~~~

「金を持ってこい。今すぐ持ってこないと、1人ずつ殺すぞ」

バキューン、天井に銃弾を撃つ。

きゅん

「（強盗か……）」物陰で犯人の様子を見る。

「（強盗は……一人か……よくまあ一人でやるな）」

「ルーク。」っとルークの後ろから、ルークを呼ぶ声がした。

「「うわ、ナ、ナギサか」「何が起きたの?」「エミリアも来ていた。」

「強盗だ。犯人は見える限り一人だな。」
「つとまったその時、
バタバタバタ、

「「「!?!?」「」

「ガーディアンズだ。武器を捨てて投降しろ。」

「「おいおい、人質がいるんだぞ」

「ガ、ガーディアンズが怖くて強盗なんかできるか」
「つと強盗犯は銃弾を一般人に向ける。」

そして、

バキューン

きや〜〜

銃声がした……。しかし、当たったのは、

「うわあ〜」強盗犯は持っていた、ハンドガンを離す。どうやら、強盗犯のハンドガンにあたり、驚いて離れたみたいだ。だから、怪我はしていない。

「リトルウィングのルークだ!! 大人しく投降すれば、怪我をしないですむぞ。投降しないと……」
つとハンドガンを構えながら言うルーク。

「「エミリア? 私達も行った方がいいのでは?」

「ルークが言ったでしょ。ここにいろって」

「それは失敗だったな。」

「！！！！」つともう一人の強盗犯が持っていたセイバーでエミリア達を攻撃をする。

しかし、

バキユーン、

「ぐわ〜」

「こうなるぞ。」つとルークが後ろ向きで銃弾を撃った。いや、前方あった鏡を見ながら撃った。

「は、はい……って、なんてね」

バキユーン

「！！！！」

「ルーク！！」

「ざま〜みる。」

バキユーン

「ざま〜」

「そんなんで俺を倒せると思ったか？」っとルークが言った。

「捕まえる！！」っとガーディアンズ達が強盗犯達を捕まえる。

「ルーク！！大丈夫？」

「大丈夫か？ルーク」

つとエミリアとナギサが心配する。

「大丈夫だよ。ただのかすり傷だ」

「でも、血でてるよ」

「ルークさん」っと後ろから声がした。

「ルウ？なぜここに？」

「強盗犯を捕まえに来たんです。それよりルークさん。早く我々の船に乗ってください。」

「なんで？」

「怪我をしたのは、我々ガーディアンズの実責があります」

「べ、別にあなた達の実責だといってないぞ」

つとるが言っ。

「しかし、あなた怪我人です。怪我人の方々は我々の船で病院まで連れて行きます。」

「だったら、他の怪我人を病院まで連れて行ってくれ。俺は病院にいくほどの……おっと、」つとふらつくルーク

「ルーク？大丈夫？」

「ああ、何か、めまいがするな。」

「めまい？」

「ルークさん、強盗犯のハンドガン調べましたら、あのハンドガンには、毒が付いていました。」

「毒だと」

「はい、ですので、検査をかねて我々の船で病院まで来てくれますか？」

「はあく分かったよ」洪々ながら頷くルーク。

「あ、あたしも」つとエミリアが行ったが……

「お前達は先に帰れ。荷物があるんだから。」

「でも、」

「何かあったら連絡するから。」

「じゃあ、行きましょう」

「ああ、」っとルウの後に付いていくルーク。

ルークがガーディアンズの船に乗るのを確認すると、

「……帰ろうか？」

「買い物続きはしなくていいのか？」

「もういいよ、それどころじゃなくなったし、」っとエミリアが手を上げ、タクシー（このタクシーは空飛ぶ車です。乗客を探す時、乗せた時は低空飛行で移動します）を止め乗る。

「ほら、ナギサ早く」

「ああ、すまない」っとナギサもタクシーに乗る。

そして、エミリア達の乗せたタクシーはエミリア達が止めた船まで向かって行った。

〈病院〉

「とりあえず、解毒剤で毒の方は除去しました。」

「ありがとうございます」

「ですが、弾丸が身体に入っているので、取り除く手術をしたいん

ですが……」

「このままでいいよ」

「いけません。今は、何もありませんが、何が合った時には遅いですよ」

「じゃこので、取ってくれ」

「はい？」

「麻酔などしなくていい、今すぐ」

「む、無理ですよ。」

「じゃ手術室で、やってくれ、今すぐ」

「わ、分かりましたよ。じゃこれに寝て下さい」

「担架？怪我人じゃあるまいし」

「立派な怪我人ですよ」

二時間後

「弾は取りましたよ」

「ありがとうございます」

「定期的に病院に来て下さい。」

「分かった、分かった」

「身体に異常がありましたら、すぐに病院に」

「分かりましたよ、では、失礼します」

「お大事に。」

〈パルム・病院駐車場前〉

「ルーク」っとエミリアが手を振った。

「悪いな、エミリア。迎えに来てもらって」

「ううん、気にしないで。・・・怪我は大丈夫？」

「ああ、解毒剤も飲んだし、薬ももらった。何か合ったら、病院に
来いだって」

「よかった、」っと安堵をするエミリア。

「じゃ送ってくれる？」

「うん、分かった」

ルークとエミリアは、船に乗り、リトルウィングに向かった。

2 3 ルーティン・インガム & amp・ルークの怪我（後書き）

ルーティンの事と、ルークの身体の怪我に付いて編でした。次は第三話にするか、2 4にするか迷ってます。

誤字、脱字がありましたら教えて下さい。

2 4 ミケの失敗（前書き）

ミケの失敗です。ミケの秘密が分かります・・・多分。

では どうぞ。

2 4 ミケの失敗

↳ 種族部隊・本拠地、会議室

「帰ったよ」「っとディックが会議室の椅子に座ってるソラとリオルに言う。

「お帰りなさい。」本を読んでいたソラが本から目を離し返事をした。

「お帰り〜。」「ソードの手入れをしながらリオルが返事をする。

「兄の怪我は……」

っとソラが聞く。

「大丈夫だよ。今、リトルウィングの自室で寝てるよ。お見舞いに行つてあげて」っといつもの優しい口調でディックが答える。

「え？連れて帰らなかったんですか？それより、なぜ兄がリトルウィングに？」

「リトルウィングに、なぜいたのは、知らないけど、連れて帰れなかったのは、連れて帰れなかったんだ」

「え？」

「あの場で応急措置して、病院に連れて行くのは嘘で、治ったディ

才君をここに連れてくるはずだったんだけど、彼の仲間達に阻まれてね。仕方なくリトルウィングに置いてきた。」っとディックが答えた。

「なぜ、兄はリトルウィングにいるのが、分かったんですか？」

「彼にあげた店のパンフレットに、発信器をつけといたのさ。まさか、怪我をしていたのは、予想外だったね」

「ところで、ソロさんとミケは？」っとリオルが聞く。

「ソロは、また調査に行ったよ。ミケは、例の検査に行かしたよ」

「ああ、月に一度の検査のやつね」

「うん、本人は大丈夫って言うてるけどね。一応、みて、もらうように言ってるんだ。まさか、こうなる事とは、僕も本人も思わなかった、と思うよ」

6ヶ月前

(欠片事件前・ルークとエミリアがGRM社にいるとき)

（一種族部隊・本拠地・転生室にて）
（ルークと会う前なのでディオンのなってます）

「どうだ……兄貴？」

「どうやら、成功したみたいだ」

ディオンの黒いオーラが漂ってる。

「な、なんだか別人にみたいだ。口調も変わってるし……」

「俺達の転生は、他のと比べると少し変だな。」

「いや、だいぶ変だと思うぜ。やっぱり普通の転生がいいんじゃないよ……」

「……、それだと強くなれないよ。」

「口調が戻った……」

「そのうちなれるよ。君もやる？」

ソロは、右手を降りながら、

「やめとくよ、闇の転生なんて、まるで悪人みたいだぞ。」と答えた。

「時には、闇の力も必要だよ。あれ？」何かを思い出したディオ
ン
「どうした？兄貴？」

「ミケは？」

「ミケ？ミケなら、転生するのによつやく材料を集めて、転生する
つて、第二転生室に入ってたぞ」

「あの古い転生システムを？新しいのがあるのに、何でかな？とこ
ろで、ミケの集めた材料わかる？」

「いや、全部はわからないけど、一つだけなら。あれは分かりやす
い、やつだったよ。」

「なんだい？」

「確か、あれは、モトウブに生えてる、ヘンゲソウだったか」

「え？ヘンゲソウ？」

「ああ、間違いない。あの葉っぱの形は……」

「まずいよ、今すぐ止め……」

「ドゥ〜〜〜〜ン……！」

「な、何だ？今の爆発音は？」

「・・・遅かった。」

つとディオオンが呟き、第二転生室に向かった。

（第二転生室）

「ゴホ、ゴホ」ミケが咳をしている。全身汚れている。

「ミケ、生きてる？」つとディックが言う。

「な、なんとか・・・」

「なんともないのか？」つとソロが言う。

「うん、それより、ディオオン兄さん、ソロ兄さんみて、やっとできたよ」

「なにが？」つと聞くソロ。

「・・・」

ディオオンが右手で顔に当てる。

「完成したよ。僕の最終兵器、新・ミラージュプラスト!!」つと

いったが、

「ん？」「っとソロ。

「あれ？」「っとミケ。

ミケのミラージュブラストは出なかった。出たのではなく、

「な、何で、」自分の姿をみて、驚くミケ。

「ミラージュブラストじゃなく・・・なんでナノブラストなの？」
「っと叫んだミケが倒れ、気絶する。

「「ミケー!!」「」

「ミケの自室」

「兄貴、一体どういう事だ？」「っとソロがディオオンに聞く。

「多分、ミケは転生を間違えたんだと思うよ。」

「て、転生を間違えた？」

「僕達の転生システム、闇の転生以外かなり古いだろ？」

「ああ、普通に転生するには素材を使わない。っていつか何で転生に、素材必要なんだよ」

「さあ？分かんない。」

ディオんとソロが話していると、

「んっ」「ミケの目が開いた。

「ミケ？大丈夫？」っとミケに聞く。

「うん、僕……どうしたの？」　　っとディオんに聞くミケ。

「転生にしようとして、失敗したんだ。」っと答える。

「なんで？僕の転生は成功したし、素材も間違ってるないよ。」っとミケが言っが、

「はあ〜」

ディオんがため息をつく。

「よくみてみな」っとディオんが転生の説明書をミケに見せる。

「ん？」「っとソロとミケが説明書を見る。

【ヒューマン、ミラージュブラスト強化、転生】
キョウカノ石
イリヨクゾウカ石
テンセイ石
各ブラストのユニット

【ニューマン、ミラージュブラスト強化、転生】
キョウカノ石
イリヨクゾウカ石
テンセイ石
各ブラストのユニット
各フォトン（ブースターといったもの）

【ビースト、ナノブラスト強化、転生】
キョウカノ石
イリヨクゾウカ石
テンセイ石
ヘンゲソウ

以外省略

「あれ？ヘンゲソウは……」

「うん、ヘンゲソウはビーストに使うんだ。」

「……」

「でも、間違つて転生したとしても、失敗で終わるんじゃないか……。それにヒューマンでナノブラストが使える様になるのはおかしいんじゃないか？」とソロが言う。

「僕にも分からないよ。何でこうなったのか。」とディオオンが言った。

「も、元に戻らないの？」

「うん、一生そのままだね」

「……まあ、いいや」

「ず、ずいぶんあっさりしてるな」

「失敗したものは仕方ないし、そのうち慣れると思うよ。」とミケが言う。

「そうだね。でも、これ以上、ミケの様な人が出ない様に、あの転生システム壊すことにするよ。」

「おい、兄貴。別にそこまで……」

ド「~~~~ン〜！」

「「「……」」」

ピュピュピュピュ

ピッ

『破壊しました。』

「ご苦労様。」　　つとお礼をいい、通信を切る。

「いいのか？兄貴。かなりの年代物だったのよ……」

「ミケの様な人が出ない様にためだよ。」

「多分大丈夫じゃないか？ミケの様なバカはいないし」

「ソロ兄さん、ひどいよ。」

「まあ、それはいいとして、ミケ」　　つとディオオンがミケに向く。

「な、何？」

「とりあえず、ミケは検査を受けて。さらに月に一度の検査を受けなさい。」

「え〜。」

「奇跡的に成功したんだ。身体に異常がないとは言えないからね」

「わ、分かった」　　ミケがしぶしぶ頷く。

「じゃあ、ソロは闇の転生を……」

「俺は、旧の転生で転生をしたから大丈夫。」

「そっか、じゃあソロは今日はもう休んでいいよ」

「分かった」

「僕は？」

「僕と一緒に治療室に行こう。」

「分かった。」

ソロは自室に、ディオソとミケは治療室へと向かって行った。

（現在）

「そんな事があつたんですね」つとソラが言った。

「でも、月に一度の検査は多くない？」つとリオルが聞く。

「いや、もうちょっと検査を続けるよ。後半年だね。半年たったら、

三ヶ月に一度の検査をする様に言つよ「っとディックが答えた。

「それよりも・・・」

「「?????」」

「君たち、闇の転生を・・・」

「「断る!」」

次回 第三話：絆

2 4ミケの失敗（後書き）

反省点は沢山あります。

一つは、ヘンゲソウやイリヨクゾウカ石などの名前。こづいづ名前しか思いつかなかったんです……。

ってか、転生に必要なのはおかしいですね。

でも、転生するにはそれぐらいの努力しなさい、って事にしてください。

第三話：絆 1（前書き）

第三話：絆が始まりました。ようやく三話って感じですね。この第三話：絆は、少し長くしたいと思います。

では、第三話：絆 1をご覧ください。

第三話：絆 1

（夢）

ディオは夢を見ている。ディオの前には、1人の青年がいた。

（会話だけに、なります）

『ディオ！！俺と戦え』

『……………』

『どうした！！構えろ！！』

『……………無理だ……………』

『何故だ！！早く構えろ！！』

『他に治療方法があるはずだ。』

『まだ言うか？俺はもう、SEEDに感染してるんだ！！もう、助かる道はない！！だから早く』

『時間が経てば治る薬も出る。だから……………』

『待つてたら、取り返しのつかないことになる。もう……諦めるしかない』

『……』

『それに、最後にお前と戦いたい。そして、……悔いのない戦いをしたい。』

『矛盾してるぜ。取り返しがつかないなら、戦わないで、俺が止めをさせばいいだろ？』

『……お前がそんなこと出来るか？仲間想いのお前が……』

『

『……』

『だったら……仲間のために、そしてグラールのために戦えよ。』

『

『……』

『これは言っちゃ悪いかも知れないが、カインも同じだと思っ』

『……』

『カインも言ってた、自分のせいで、皆が迷惑してるってよ。特にディオに迷惑をかけたってよ。』

『……』

『……悪いな……こんな時に……』

『いや、かまわない。あいつは……最後まで俺に迷惑ばかりか
けてたよ。』

『そうか……』

『分かった。』

『???』

『お前の望み通り。戦ってやる』

『……すまねえ』

『かまわない……いくぞ!』

『おお!』

）数分後

『ブライト……』

『はは、やっぱり……ディオは強い……全然勝てねえ』
『当たり前だ』

『なんだよ……もう……少し……優しい……言葉……
……ないの……かよ』

『ブライト……あまりしゃべるな』

『もう……死ぬ……んだ……話……ぐらい……
させる。』

『話は治ってからでいい。』

『お前……本当……諦め……悪……いな。』

『うるせえ』

『あは……はは、やつ……ぱり、俺……の……ラ
イ……バル……は……お……前……だ……
……デ……イ……オ……』

『ブライト？』

『……』

『おい、起きろよブライト』

『……』

『ブライト!!!ブライト!!!』

『.....』

『ブライト!!!!!』

「リトルウイング
ルークのマイルーム」

「んっ」

ととゆっくりディオの目が開く。

「ここは.....」

辺りを見渡す。

（そうか。俺、確かルーティンに.....）

少しずつ記憶が戻ってくる。

そして身体を起こす。身体や手や足は包帯が巻かれていた。

(ここまで、怪我をしたのか……)

手を開いたり閉じたりする……

(ブライト……)

右手を顔に当てる。そして

プシュー

(んっ？誰だ)

っと、右手を下ろし、ドアを見るディオ。

ドアを開けたのはエミリアだった。

「あっ」

「あっ」

目が合う2人……

「エミリア……」

っとディオが言った瞬間

「ルーク!!」

つと言ったエミリアが走ってきて、ディオ（ルーク）に抱きついて来た。

「エ、エミリア？」

不意の事なので驚くディオ。

「！！！！エ、エミリア。痛い、痛い」

つと叫ぶディオ。だが、エミリアはさらに強く抱き締める。

「マ、マジで痛いつて！！もう少し、力抑えてくれ。」

つとディオが言うがエミリアがディオ胸に顔を当てる。

「……………心配したのよ」

「え？」

涙声でエミリアがいった。

「10日間も……………目が覚めないから……………」

つとエミリアがいった。

「10日間……そんなに、眠ってたのか？」

「うん」

エミリアがディオの胸に顔を当てるため、顔を少しだけ、動かし頷く。

「……心配……かけたな」

つとディオがエミリアを優しく抱き締め返す。

「ううう、ばか、ばか、ばか」つと云ったエミリアがまだ強く抱き締めてきめ、泣き始めた。強く抱き締めてきたので、痛い表情をしたディオだったが、ディオもエミリアを優しく抱き締めた。

しばらくして、抱き締めていたエミリアが手を離したので、ディオも手を離した。

「……ごめん。いきなり、抱き付いたりして……痛かった？」

つとエミリアが聞く。

「ああ、少しだけけど」

つとディオが答えた。

「ごめん。本当は、こんなつもりじゃあ、なかったんだけど、あんなが目を覚ましたから、つい、嬉しくて……」

「そうか……」

「怪我……大丈夫？」

「身体はやつと起こせるぐらいだ。まだ立って歩けないよ」

つとディオが言った。

「その怪我を治したのはね、ディオオン達なんだ」

「そっか、後でお礼しないと」

つとディオが言った

「ね、熱は？」

つとエミリアが言った。

「熱？多分、そんなに高くないと思うよ。」

「じゃ、じゃあ確認させて」

「構わないけど？」

つとエミリアがルークに近づく。そして……

「……／／／／」

「……え？デコで／＼／＼？」

不意にデコでやられたので少し照れたディオ。

「ね／＼／＼、熱はないね／＼／＼」

照れながら言うエミリア。

「そ、そうか／＼／」

つとディオも照れながら言った。

「じ、ごめんね。本当に……怪我してるのに……熱なんかないよね」

「そんなことないと思うけど……」

つとディオが言う。

「あ、あたし、帰るね。これ以上、ルークの怪我が悪化しても困るから。」

つとエミリアがディオの部屋を向かおうとした時、不意にエミリアの手が捕まれる。そして……引っ張られる。

「きゃあ」

つとエミリアが言う。エミリアの手を引いたのは、他にもない、ディオだった。そしてディオがエミリアの胸に顔を当てる。

「ちよつ、ちよつとルー……ク？」

つとエミリアがディオをひき離そうとしたが、出来なかった。何故なら、ディオが泣いていたからだ。

「ルーク……どうしたの？」

つとエミリアが聞く。

「ごめん、しばらく……ごうさせて……くれないか？」

「え？」

「少し……だけで……いい……少し……だけ。」

つと涙声でディオが言う。

これ以上、エミリアは何も言わなかった。そしてエミリアはディオがやったように優しく、抱き締め返し自分の頬をディオの頭にのせた。

しばらくしてディオが寝息を立てたので、エミリアがゆっくりディオをベッドに寝かせた。寝かせたディオに毛布をかける。そしてディオの目に涙がついていたので、自分の手で涙を優しく拭き取る。そして自分の顔をディオの顔に近づけ、優しくディオのデコに自分の唇を当てた。そしてエミリアは

「お休み……ルーク……（好きだよ）」

最後の言葉は、人に聞こえないほどの声で言った。そしてエミリアはディオの部屋を静かに出ていった。

第三話：絆 1（後書き）

絆って言うよりも、

ディオ×エミリアのちよいラブの回になってしまいました。果たしてこれが、ちよいラブの回なのか、ちよいラブの回じゃないかは自分じゃあ分かりませんがまあ、ちよいラブ・・・じゃあないかな？

エミリア「（あたし達、こんな奴に恥をかかされたんだ・・・）」

ディオ「ZZZ・・・」

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

第三話・絆 2 (前書き)

第三話・絆 2 です。

では、さようなら (さなー！)

第三話・絆 2

く夢

ディオは、また、夢を見ている。さっきとは違う夢。ディオと少女が話をしている。

『ディオくん』

『だから、【くん】はやめろって。年上だぞ』

『じゃ、何て呼べばいいの?』

『【ディオさん】とか、【ディオ】でいいよ』

『うーん、だったら【ディオくん】がいいな』

『恥ずかしいから、やめろ!!--』

『あゝあ、照れてる』

『お前、俺をバカにしてるのか?』

『……ううん、こつやって楽しく話すの初めてだから……』

『ごめんな。また、悪い事言ったな。』

『ううん、ディオくんは悪くない。ディオくんは優しい人だよ』

『え？』

『私達が危ない時に助けてくれたし、私達に生きる希望をくれた。』

『エリナ……』

『私……ディオくんの事……大好きだよ。』

『……』

『……今まで、ありがとう。』

『ああ、』

『もう……時間だね……』

『ああ、』

『また、会おうね』

『そうだな。元気に暮らせよ。ちゃんとよい子でいるんだぞ』

『私達のなかで、私が一番よい子だよ。』

『よく言うよ。お前が一番世話のやけるよ。』

『ひびく。』

『あはははは、』

『笑わないでよ!!--』

『ごめん、ごめん』

『私の将来の夢・・・言っただけ?』

『そういえば、あの時間いてないな』

『は、恥ずかしかったんだ///』

『ん?』

『わ、私の将来の夢はね。』

『何だ?』

『ディオくんのお嫁さんになる事!!--』

く
リトルウイング
ルークのマイルーム

夢から覚めるディオ。

(いつの間にか、寝てたんだ……。)

そして、夢で見たことを思い出す。

(あいつら……元気にしてるかな？あれから、もう4年になるな……)

そしてディオは、ある少女の事を考えてる。

(エリナ……か。ふつ、俺のお嫁さんか。その時は、俺は、おっさんに、なってるな。今年で確か……11歳……か。)

そしてディオは、カレンダーを見た。

(あいつらと初めてあった日は……来週か……)

つとなど考えてると。

プシュー

「ん？」

「ルーク……大丈夫か？」

(この声は……)

ディオの前に現れたのは、ナギサだった。

「ナギサか」

「ああ、貴方が目を覚ましたってエミリアが言っていたのでな。様
子を見に来たのだ」

「わざわざ、すまないな。」

「き、気にしないでくれ。わ、わたしが自分でやった事だ」

「いや……嬉しいんだ。リトルウィングを勝手にとびたした俺
をこんなにも、心配してくれるのがさ……」

「ルーク……」

「ありがとうな、ナギサ」

「れ、礼を言っな。な、何だか、恥ずかしい……／＼／＼」

「そ、そうか？」

〈数分後

ナギサは、ディオに申し訳なさそうに

「すまないな、貴方は怪我をしてるはずなのに、長話などしてしま
って」

つと謝った。

だが、ディオは、笑いながら。

「俺は別に気にはしないさ。」

つと言った。その言葉に、ホツとしたナギサ。

「貴方は、本当に優しいのだな」

「・・・」

『ディオくんは、優しい人だよ。』

「ルーク？大丈夫か？もう少し休んどいた方がいい。」

つと言ったナギサがディオをベッドに寝かす。

「たくさん、寝たから大丈夫だよ。」

つと言ったディオが起き出そうとする。

「ルーク！！無理をするな！！」

つとナギサが言ったとたん、

「うわ、」

っと前に倒れる。

「え？うわ」

ディオが前に倒れた場所にナギサがいた。ナギサもいきなりだったので、一緒に倒れる。

「……／／／／」

「……／／／／」

ディオがナギサをおい被さるように倒れたので、顔がとても近いところにあった。

「ご、ご、ごめん。け、怪我はない／／／？」

っと顔を離し、焦って聞くディオ。

「わ、わ、わたしは、大丈夫だ。そ、それよりルークの方は？」

ナギサも焦って聞く。

「お、俺は大丈夫」

「そ、そうか。わ、わたしも大丈夫だ。」

「そ、そうか、よかった。」

まだディオが焦っている。

「で、では、わたしは、こゝ、これで、帰るぞ。」

ナギサもまだ焦っている。

「あ、ああ、ありがとうな」

少し落ち着いたディオがお礼を言う。

そしてナギサは、ルークの部屋を出た。

「ふう〜」

ディオがゆつくりと、ベッドに上がる。そんなに高くはないので、楽にのぼれる。

ベッドに入ったディオは、ある事を思い出した。

『この世に強い絆を持てば、不可能を可能に出来る。君たちのその強い絆を力に変える。それが唯一、グラールを救う事であり、彼らに対抗出来る力。それが絆さ』

（絆・・・か。リトルウィングを勝手にとびたしたこの俺に、皆は力を貸してくれるか。）

つと疑問をしていると、訪問者が、一人、また一人とやって来た。

第三話：絆 2（後書き）

ディオ×ナギサの話でした。

絆って、いま考えて見ると2011年の漢字一字ですね。やはり、絆は大切にしないとですね。

ナギサ「それより、今回の話しに絆は関係あるのか？」

まだ、最初なんで、大きな発展はないです。絆って言うのは・・・
ディオ「誤字、脱字があったら、このバカ作者に教えてあげてくれ」

第三話・絆 3 (前書き)

絆って今考えると難しい言葉ですよ。多分こんな感じかと・・・

第三話・絆 3

3日後・ルークのマイルーム

「はあ」

デイオは、ため息をついた。その訳は、

プシュー

「よお、気分はどうだ？」

入って来たのは、クラウチだった。

「テレビ局やガーディアンズ。そして、エミリア達に時間の見方を教えてやってくれないか？これじゃ治る怪我も治らない……」

「それは自分で教える。」

「じゃ、あなたにも教えないとな。もう疲れたんだ。また、今度にしてくれ」

「それだけ喋れるんじゃ元気になったな。」

「おかげさまでな」

ディオは、起き上がりベッドの上に座ってる。

「あんたが、ここに来るなんて、珍しいな。」

「おめえさんにちょっと頼みたい事があるんだ」

「依頼を受けろってか？」

「怪我してるやつに、依頼を受けろって言わねえよ。」

「じゃ、何だ？」

「これだ。」

つとクラウチが1つの箱を出す。

「何だ？これ？」

クラウチに渡された箱を受け取る。

「開けてみる……」

「……爆弾じゃ、ないだろうな？」

「んなわけ、あるか!!」
つとクラウチが言う。

ディオは、言われた通り、箱を開ける。すると、

「何だ？これ？」

それは1つの巾着だった。

「こいつを届けて欲しい依頼があつたんだよ。」

「依頼を受けるって言わねえよ、つかいっておきなが、俺に頼んでるじゃねえか？それに依頼を受けるにしろ、頼む場所間違ってるだろ。」

「最初は、断ろうとしたが、おめえさんを思い出してな。」

「俺？」

「届け先は、パルムのカリス都市。パルムの大都市からはそんな遠くない。歩いて10分ぐらいの場所だ」

「だから、何で、俺なんだ？」

「歩くりハビリに丁度いいだろ？」

「おいおい、リハビリでこの依頼を受けたのか？まあ、確かに届け物なら、歩くりハビリにちょうどいいかも知れないが……じゃなくて、依頼にリハビリってないだろ。それに俺1人か？」

「安心しろ。エミリアもついていくように言っておいた。」

「だったら、エミリアだけで……」

「じゃ、頼んだぜ」

つと言ったクラウチがルークのマイルームを出た。

「はあ」

つとため息を出す。

「ま、確かにリハビリをかねて行くか。」

ディオは、ゆっくりと、ベッドから降り、ゆっくりと入やをでてマイシップに向かった。

「あ、きたきた」

「ごめんな、エミリア。待ったか？」

「ううん、今来た所だよ」

そう言ったエミリアはディオのために椅子を用意した。

「あ、悪いな」

つと用意された椅子に座った。

「お父さんも、ひどいよね。ルークにこんな仕事させるなんて」

「まあ、いいじゃないか？クラウチはクラウチなりに考えてくれたと思えば（そういえば、俺の本名言ってなかったな）」

っと考えてながら、ディオは言った。

「嫌な時は、嫌だって言った方がいいよ。」

「……」

(そういえば、良い思い出をつくるために、いやな仕事でも引き受けたっけ……)

「ルーク？」

(クラウチの借金を取りに行ったり、亜空間事件後も面倒な事件も受けたな)

「ルーク……」

「……」

ディオが、エミリアの声にはっ、とする。

「本当に大丈夫？ やっぱり休んでた方が」

っとエミリアが言う。

「大丈夫だよ。エミリア、船を出してくれるか？」

っとエミリアに言う。

「うん、分かった。でも無理しないでね。」

「ああ、分かった。」

↳パルム・カリス都市↳

「わざわざすみません。」

つと女性が頭を下げる。

「いえ、気にしないでください。」

エミリアが女性に言う。

「すみません。もう、お母さんたら、宅配便で送ればいいのに」

つと女性は言った。

「近くで仕事があつたので、失礼かも知れませんが、ついでに、つて事で持って来たんです」

つとディオが言った。

「失礼なんて、とんでもない。こちらが仕事の邪魔をしてすみません。あの〜おいくらですか？」

女性が財布を出しながら言った。

「お金なんて要らないですよ。」

つとエミリアが首を振る。

「でも、母が迷惑をかけて、せつかく、持って来てくださったんですから」

「このような事でお金をもらったら、上の人に怒られるんで」

「じゃ、これはほんの気持ちです。こちらだけでも受け取ってください。」

「いえ、ですから……」

エミリアがもう一度断ろうとしたが、

「すみません。いただきます」

つとディオが頭を下げ、女性が持っていた箱を受け取る。

「ありがとうございます」

「いえ、じゃ俺達はこれで」

つと女性の家を後にする。

「あんだ、何で、それいただいたの？」

エミリアが怒りながら言う。

「断つても返つて失礼な事もあるからな。それに……」

「それに？」

「何でもない。さあ、帰る。」

「えっ？ちよっと気になるんですけど。」

「何が？」

「さっきの、それに、よ。どついつ意味なの？」

つとエミリアが迫る。

「そのうち話すよ。今日は、もう良いだろ？」

「……分かった」

エミリアがしぶしぶ頷いた。

だが、

「！……！」

いきなりディオが膝をつく。

「ルーク！！大丈夫！！」

「ああ、やっぱり、無理があつたかな。」

「い、今、病院に連れていくね！！」

しかし、近くに船がないので、

「すみません！！誰かいませんか？」

つとエミリアが叫ぶ。

その声でエミリアの元に駆けつける一般人の方々。

「どうしました？」

「何かありました？」

「え？何々？」

「すみません。誰か救急船（救急車みたいなもの）を呼んでください。連れが大変なんです。」

「わかりました」

「ありがとうございます」

つとエミリアが頭を深々と下げる。

「もしもし、パルム病院ですか？怪我人がいるんです。場所は……」

つと一般人の方が電話をする。

「ルーク。もう大丈夫だよ」

エミリアがディオの肩に手をやる。

「そっか、ありがとう」

「あたしより、皆さんに感謝しないと。」

「そうだな……」

(絆……か。失わず訳にはいかない。何とんでも、守らないと)

その光景を見ていたソロが

「兄貴、大変だ。ディオの兄貴が病院に行くぞ。」

『なんだって？何処の病院だい？』

「パルム病院だ。」

『くっ、一番防犯の高い病院か。』

「どうする？兄貴」

『ソロ。とりあえず帰って来て。作戦会議だよ』

「分かった。」

つと通信を切ったソロがその場を去った。

第三話・絆 3 (後書き)

絆ねえ)。・・・難しい・・・。でも、頑張って書きます。

誤字、脱字がありました教えてください。

第三話・絆 4 (前書き)

今回は重要な回となっております(自分なりに)。最後の方は、無理やりやったって感じですね。

第三話：絆 4

くパルム病院 326病室

「どう？ルーク大丈夫？」

エミリアがディオ（ルーク）の怪我の心配をする。

「な、なんとか・・・」

「あまり、大丈夫じゃないみたいだね」

などと会話をしていると、
ガチャ

「「??？」」

「ルーク、無事か？」

クラウチが入ってきた、その後ろにウルスラやチェルシーも入ってきた。

「お、お父さん。」

「クラウチ。それにウルスラさんやチェルシーまで」

「怪我は大丈夫？」

つとウルスラがディオに聞く。

「少し痛むだけです。それより、仕事の方はいいのか？」

「お前が倒れたって聞いたから、来たんだが……大丈夫みたいだな。」

「ちょっとクラウチ。だいたいあなたが、ルークに依頼を受けさしたから、こうなったんじゃない」

「俺はルークのために依頼を受けさせただけだぞ。リハビリをかねて」

「それで、倒れたらリハビリの意味がないでしょう。」

「チョット、チョット？ココに病人がいるンダから、静かにしないト、ダメヨ」

つと話をしていると、

コンコン

「あ、はい」

つとディオが返事をする。

入ってきた来たのは医者と看護婦だった。

「ルークくん、怪我の具合は、どうかね？」

「少し、痛いつて感じですね」

「見せてくれるかい？」

「あ、はい」

ルークが腕を出す。

「……」

「いせんせい医者どうですか？」

つとエミリアが聞く。

「この包帯の巻き方……上手ですね。しっかりと当ててある。」

「俺の……仲間がやりました」

「そうですね。でも血が染み込んできてますので、明日に消毒と新しいの巻にき直しをしますね。」

「あ、はい。わかりました」

「では、これで」

つと部屋を出た。

「さてと、俺達も帰るか。」

「そうね。エミリアもね」

「えっ?」

「そうヨク。ゆっくり休ませテあげないト。」

「分かった。」

「すまないな、気を使わせてもらって。」

「んじゃな、ルーク。また逃げ出したりするなよ」

つとクラウチが笑いながら言う。

「するか、」

つと否定する

「それじゃ、ルークまた明日ね」

つとエミリアが言う。

「ああ」

エミリア達が部屋を出る。

部屋を出てしばらくすると

「すみません」

エミリア達に声をかけた看護婦がいた。

「あ、さっきの看護婦さん」

っとエミリア。

「せんせいが呼んでおります。」

「えっ？何ですか？」

っとエミリアが聞く。

「……ルークさんについてみたいです」

「何だって？」

っとクラウチが言う。

「「「ちらです。」」」

っと看護婦が部屋を案内する。

「すみません。いきなり呼び出しまして。」

「いや、別に構わねえ。それより、ルークについてってなんだ？」

「実は、ルークくんが運ばれた時に、レントゲンとMRIを取ったのは、エミリアさんに言いましたよね。」

「はい、聞きました。」

「実は、……結果が出ました。」

「結果が？」

つとウルスラが聞く。

「……はい。」

あまり元気がなく、医者が答える。

「怪我は、どうだったんですか？」

つとエミリアが聞く。

「……」

「何処が悪いところがあったのか？」

つとクラウチが聞く。

「……悪いところがあったところか、……ありがとうございます。」

「」「」「えっ？」

「ルークさんの身体もつ、ぼろぼろになってます。見ただけでは分かりませんが、ルークさんの身体はぼろぼろです。」

「そんな」

「ルークさんが倒れた時の事を、君に聞いたよね。」

「……はい」

「多分、その症状が多分、ルークさんの身体についての症状の一つでしょう。」

「そんな、」

つとエミリアが言う。

「このまま続ける事は、出来ねえか？」

つとクラウチが聞く。

「このまま続けるなんてとんでもない！！続けたら、大変な事になります。」

つと止める医者。

「どつなるのかしら？」

つとウルスラが聞く。

「今のルークくんの身体はルークくんの動きについていくのに一杯って感じですよ。もし、このまま続けると、身体がルークくんについてゆけず、ルークくんの身体が耐きれず、破壊されてしまいます。身体が破壊されると、ルークくんは二度と歩けない身体となります。」

「そ、そんな、」

つとエミリアが涙で言う。さらに医者も、

「いえ……、まだそれならいいほうです。」

「どういうことだ？」

クラウチが聞く。

「身体が破壊後、ルークくんに激痛と痙攣が襲います。さらに破壊されたルークくんの身体は、免疫力を急激に失い合併症を起こす危険性があります。さらに、会話も不可能になる可能性も、そして……最悪の場合……命を落とす危険性も」

「……」

ボタン

「エミリアー!!」

つとクラウチが言うが、エミリアはそのまま、部屋を出る。

「ちっ、チエルシー。エミリアをおってくれ」

「了解ネー」

つとエミリアの後を追う。

「すみません。今、言うべき事ではないですよね。」
つと申し訳なさそうに医者が言う。

「別に構わねえ。いずれ聞かされるんだ。」

つとクラウチが言う。

「この事ルークに言った方がいいかしら。」

「……もう聞いているよ。」

「」「」「」「」

クラウチ達が振り返る。そこにはディオとディオを支えてる看護婦がいた。

「何か怪しいと思ったら、やはり何かあったんだな。」

つとディオ言った。

「君（看護婦）、ルークくんに話したのか？」

「わ、私は……」

「この人を責めないでくれ、俺が無理を言って、言ってもらったんだ。それより、」

ディオがクラウチとウルスラを見る。

「エミリアとチエルシーは？」

「それが……」

ウルスラ答えるが、言葉が出ない。

「……シヨックで飛び出したんだな？」

つと言ったディオは、通信機を出す。

「エミリアか？どうした？元気がないな？そうか、何でもなければそれでいい。実は、君たちに言い忘れた事があったんだ。悪いが戻って来てくれるか？ああ、今じゃなきや駄目なんだ。ああ、すまないな。じゃ待つてるよ。」

ピッ

「どういう意味だ？つとクラウチが言う。そのまんまだよ。言い忘れた事があったんだよ。」

「言い忘れた事？」

つとウルスラが聞く。

「はい。多分もうすぐエミリアがここに戻ってくると思うので、先に部屋に戻ってます」

つとデイオは看護婦の肩を借りて部屋に戻る。

く数分後

ガチャ

「エミリア……大丈夫か？」

何事もなかったようにエミリアに聞く。

「うん、少し落ち着いた。」

つとエミリアが答えた。

「エミリア？あまりムリしちゃダメヨ。」

つとチェルシーが言う。

「うん、大丈夫。それより、ルークが部屋に来て欲しいって。」

「ルークが？何でだ？」

「わからない。とにかく来てくれって。」

つとエミリアが言う。

そして、ウルスラが言う

「それじゃ、あまりルークを待たせる訳にはいかないわね。いきま
しょう」

つと4人はルークの病室に向かう。

〈ルークの病室

ガチャ

4人はルークの病室に入った。しかしベッドにディオは、いなかった。ディオは正座で床に頭をつけていた。

「ルーク！？何してるの？」

つとエミリアが言う。

「何してるのって、謝ってんだよ。」

「なんで、謝ってるんだよ。」

つとクラウチが聞く。

「俺は、あんた達を騙してきた。」

「えっ?」

「今から話すのは……何一つ嘘は言わない……すべて話すよ。」

つとゆつくりとディオは話始めた。

ルークは偽名だったこと。自分の本名がディオだったこと。謎の5人の事。リトルウィングの自室であった事。リトルウィング現れた青年達の事。謎の5人がたくらんでる事。すべて話した。

「……」

4人は黙ってしまった。

その姿を見たルークは……

「……その反応が正しいよ。今まで俺に騙されて来たんだから……」

ディオが元気なく言う。

しかし、

「ああ、ごめんなさい。そういう意味じゃないの」

つとウルスラが言った。

「え？」

「おめえ、やっと本当の事を言ってくれたな。」

クラウチがディオの肩に触る。

「ウソをいうノ、もうツカレタでシヨ。」

つとチエルシーが笑う。

「ごめんね。あんたの気持ちが変わらなくて。」

エミリアが涙声で言う。

「言わなかった自分が悪いんだ。謝る必要はないよ。」

「しかし、種族戦争とは、物騒な事を考えるな。」

「ガーディアンズはこの事を知ってるの？いや、知らない。知ってるのは、ルミアぐらいだな。まあ、知ってるのは俺の本名だけだぜ。」

「なんでルミアが、知ってるの？」

「成り行きで、ちょっとね。」

「しかし、面倒な事になったな。」

クラウチが右手で頭をかく。

「まずは、どうしましょうか」

つとウルスラが右手を顎に当てる。

「その、ディックってやつが言うには、絆をどうしろって？」

つとクラウチが聞く。

「人との絆を深めれば、あいつらに対抗できるぞうだ」

「うまくいくもんなのか？」

「人との絆が持つことが出来ないようにする……それがやつらの狙い。さらに、種族戦争。そして……」

「グラールを滅ぼす。」

つとエミリアが答える

「ああ、その通りだ。」

「なら、俺達なら大丈夫だ」

「えっ？」

「ええ、確かにそうね」

「えっ？えっ？」

「えっ？つてあんたにわからないの？」

「エミリア？」

「俺達は、たくさんの苦難を乗り越えてきたて、支え合って来たんだぜ？」

「クラウチ？」

「そうね、私達あの事件があったからこそ今があるかも知れないわね。」

「ウルスラさん？」

「ソレもコレも、アナタやワタシがいたからできたのヨ」

「チエルシー？」

「あたしは、あんたに助けてもらった。しかも命にかえてまで・・・
・今度はあたしがあんたを守りたい。」

「エミリア・・・」

いつの間にか大きく成長していたエミリアに嬉しくなってしまった
ディオだった。

「まずは、ルー・・・ディオ、身体を大事にしろ。万が一の事がある
と大変だからよ。」

つとクラウチがい言う。

「安心してくれ。無理はしないからよ。・・・戦えなくても、フ
オローなら出来るから」

「そんなことより、まずはゆっくり休むのが大切よ」

つとウルスラが言う。

「絶対に無理はしないでね。」

つとエミリアが言う。

「さ、さ、ディオも疲れてるから、今日はモウかえりませヨウ。」
つとチエルシーが言った。

「そうだな、ゆっくり休んでおけ。」

「すまないな、クラウチ」

「気にすんな。」

「元気姿見せてね。」

「ああ、」

つと答えたディオ。そして、4人は部屋を出た。

ディオはゆっくりとベッドに戻り……

「ありがとう、皆」

つといい目を閉じて、ディオは眠りについた。

第三話：絆 4（後書き）

第三話：絆は、長くなるって言うっておきながら長くならなかった。

チエルシーの話し方の書き方難しいですね。もう少し勉強しますね。

絆は、自分なりにこんな感じかな？ っとなってます。

誤字、脱字がありましたら、教えてください。

3 1 誕生日（前書き）

多分、前の小説よりかは、ましになったと、思います。ちなみに作者はディオの方が年上です。

では、どうぞ。

3 1 誕生日

くリトルウィング・ルーク（ディオ）のマイルム

この部屋に1人、ビジフォンの前でボーっとしているディオがいた。彼は三日前に退院をしていた。痛みもひいて来たので退院してもいいってことで退院をした。って言うより、エミリアが、退院出来るならしよう、って言うてきた。退院するの止めると思ったんだが・・・。そして、医者に退院するのに条件があるそうだ。

一週間に一回は診断に来ること。

重たい物は持たないこと。

原生物や護衛の依頼の仕事をしてないこと。

身体を無理に動かさないこと。

これらの条件でよいなら退院してもいいことなので、それに応じたが・・・。

「つまらねえ」

いわゆる、何もするなって言われているようなものである。傭兵であるディオにとって、なおさらだ。

だが、

「今、思ったら、ビジフォンの使い方あまり知らないな。」

ディオは、ビジフォンにあまり触ったことがない。多分、指で数えられるぐらいだ。

「え〜と、どうやるんだ？」

カチカチカチカチ

「……………」

カチカチカチカチ

「……………（怒）」

カチカチカチカチ

「……………（怒）（怒）」

カチカチ、

「……………駄目だ。全然わからん」

つとすぐに諦めたディオ。

「今度エミリアに教わろうか。……………バカにされると思うけど」

つとビジフォンを離れたディオは、冷蔵庫の前に立ち冷蔵庫の扉をあける。そして、そこから、今人気のオレンジの炭酸ジュースを取り出す。冷蔵庫の扉を閉め、ベッドに座る。フタをあけ、それを

飲む。

「ふう〜」

っと一息をつく。そして、カレンダーを見てあることを思い出す。

(そういえば、明日はエリナの誕生日だな)

〜4年前

ここに青年と子供達10人がいた。部屋の中は飾りでいっぱいだ。子供達の中には尖った帽子を被っている。テーブルの上に美味しそうな食べ物がある。

『誕生日おめでとう〜エリナ』

『おめでとう』

『エリナ〜おめでとう』

『あ、ありがとう。』

みんなに祝福を受けて照れている。でもとても嬉しそうな顔をしている。

『これ、みんなからだよ!!』

っと差し出したのは、花で作ったティアラみたいな形をしたものだった。さらに首飾りや腕輪などもあった。お金がない子供達にとつて出来ることは何か、って一生懸命考えた子供達のプレゼントだ。

『うわあ〜、ありがとう』

とても嬉しそうな顔をしているエリナ。

『エリナかわいい〜』

の子供達の声にさらに嬉しそうな顔をしているエリナ。そんな、光景を見ていたディオは、

(やっぱり、プレゼントは値段より気持ちだよな。)

わいわい騒いでる子供達を見て、フツ、っと笑ってしまっディオ。それを見たエリナは

『あ、ディオくんが笑ってる』

『ホントだ〜』

『うるせえなあ。笑っちゃいけないのか?』

っとディオの言葉に首を振るエリナ。

『違うよ。デイクんの笑った顔、初めて見たから』

『えっ？』

今、考えると、エリナ達の前で笑った事がなかった。

『いつも、デイクんの顔はなんか悲しそうな顔をしてたし、私達が悪い事をした時に、怒る顔しか見てない。だから、今日、初めてデイクんの顔を見たから。』

つと言ったエリナは、なん嬉しそうな顔をしてた。さらにエリナは

『デイクんの笑った顔、かわいい』

つと笑いながら言うエリナ。それを聞いた子供達も頷いたり、うん、かわいい、の声も聞こえた。それを聞いたデイオは、少し照れてしまい。

『う、うるせえ。し、静かにしろ。』

つと強く言ったが、照れてしまってるので、説得力がない。さらにエリナが

『あゝあ、デイクくん照れてる。かわいい』

『う、うるせえって言うてるだろ。』

つと言ったデイオは、ある意地悪な作戦を考えた。

『せっかく、エリナに誕生日プレゼント買って来たのにな』

つとイヤミっぽく言うディオ。その”プレゼント”に反応したエリナは、

『えっ？なにになに？プレゼントなに？』

つとエリナがディオに聞く。だが、ディオは

『まず言うことがあるだろ？』

つとディオ言葉にエリナは、あっ、つとし、ディオの前に行き、正座をし、そして、

『すみませんでした』

つと謝る。ディオは、エリナの頬をに手をやり、エリナの顔を優しくあげる。

『そこまで、しなくていいよ。でも、よく出来たね』

つとディオは、自分の手をエリナの頬をから離しそして、

『これが誕生日プレゼントだよ』

つときれいな紙で包まれてる箱を出す。

『なにになに？』

『開けてみようよ。』

『うん』

つと頷いたエリナはゆっくりと紙を破き、箱をあけるなんとそこには、”誕生日おめでとう、エリナ” つかかれた大きなケーキだった。それを見た子供達は

『うわ〜ケーキだ』

『美味しそう』

『・・・・・・』

つとエリナが黙ってしまった。

『エリナ? どうしたの?』

つと1人の子供がエリナを見て言う。なんと、エリナは涙を流していた。

『エリナ? 何で泣いてるの?』

つと1人の子供に聞かれたので答える。

『私・・・・初めて・・・・ケーキ・・・・を・・・・見た・・・・』

『えっ?』

『ケーキ・・・・なんて・・・・食べた・・・・こと・・・・ない』

つとエリナが手で顔をおさえ、しくしくつと泣き出した。泣き止む
心配がないのでディオは

ギョツ

つとエリナを抱き締めた。

『ディオ、ディオくん?』

不意に抱き締められたので、驚くエリナ。ディオの胸に顔をやると、
とても安心出来るように感じた。そしたら、本格的に泣き出してし
まった。ディオは、エリナの頭を優しく撫でてやった。エリナが落
ち着いたころ、みんなでケーキを食べた。エリナはディオの膝の上
に座ってケーキを食べた。エリナは初めてケーキ(ナウラ三姉妹の
ケーキです)を食べたエリナはとても嬉しそうな顔をしていた。

く現在

(今でも忘れられない……エリナのあの嬉しそうな顔を……

) 「うん?そういえば今日は……」

つと考えているときなり。クラッカー音がなった。

「うわ、」

「誕生日おめでとう、ディオ」

ディオの前には、エミリア、ユート、ナギサ、クラウチ、ウルスラ、チエルシーつと言ったリトルウィングのメンバー達がいた。

そう、今日はディオの誕生日。23歳の誕生日だ。ディオの前にはケーキが持って来てあったディオは思わず笑ってしまう。

「ど、どうしたの？ディオ？」

「いや、何でもない」

（エリナも……みんなも……こんな感じに祝ってもらえてるのかな？）

（エリナ……1日早いけど、お誕生日おめでとう）

く??????

(ディオくん、お誕生日おめでとう)

「いたぞ!!あそこだ!!」

「見つけました!!場所は……」

「!!!!」

(ディオくん……助けて……)

3 1 誕生日（後書き）

ちなみに子供達は、エリナを除いて、男子4人・女子6人です。パーティーをしたのは、彼らの隠れ家です。

誤字、脱字がありましたら教えてください。

ちなみに、デイオはロリコンではないですよ。

3 2 再会（前書き）

ディオは、果たして誰と再会するのか。それは……

再会した人はこれから重要登場になります。

では、どうぞ

3 2 再会

くリトルウィング・ディオのマイルーム。

ディオの誕生日の翌日、ルークからディオの部屋の名前にかわり、リトルウィングにも正式にディオとして登録をした。ディオは、面倒だからこのままいい、って言ったのだが、ややこしくなる、ってクラウチやエミリア達に言われたので、登録をしなおした……なのだが、。

「暇だ……」

昨日と変わらず何もすることがない。しばらくして、ふっと、思い出す。

（今日はエリナの誕生日か……今日でもう11歳……か）

自分も昨日で23歳になった。自分がエリナの誕生日をあげたのは、エリナが7歳の誕生日の時だ。

（あれから、もう4年が経つ。）

っと考えていると、

コンコン

プシュー

「ディオ、おはよう」

ディオの部屋に入って来たのはエミリアだった。

「エミリア、おはよう」

つとディオがかえす

「今日はどうしたんだ？こんな朝早くに？」

つとエミリアに聞く。すると、エミリアが

「実は、あんたに買い物に付き合ってもらいたいの」

「……また荷物持ちか？」

「ああ、違う、違う。ディオに何か買ってあげたいの？」

「えっ？なんで？」

「なんで？つて、あんた昨日、誕生日だったでしょう。だから、誕生日プレゼントを買ってあげようかなってね。」

「それなら、黙って買うのがいいんじゃないのか？」

「うーん、そうなんだけど、あんた暇じゃないかなあって」

「悪かったな、暇で」

つと答えた、ディオだったが別に断る事もないので、

「わかった。」

「じゃあ、行こっか？あつ、高いのはやめてよ」

「わかってるよ」

つとディオがゆっくりと立ち上がろうと、したとき。不意に右手を顔に当てる。

「ディオ、大丈夫？ディオ」

つとディオの側によるエミリア。

「ああ、大丈夫……」

（ディオくん……助けて……）

「……」

「ディオ！！どうしたの？ディオ！！」

（この声はまさか……）

(ディオくん、助けて……お願い……ディオくん、ディオくん)

(エリナ! !)

「ディオ! !」

つとエミリアが、ディオの手を持っている。

「エリナ……」

「えっ?」

「エリナ! !待ってる! !」

つと言ったディオが、突然走り出し、自分の部屋を出た。

「えっ? ちよっ、ちよつとディオ?」

エミリアがそのあとをおう。

くマイシッブ

ディオがマイシッブで、出掛けようとしたとき、エミリアも乗って

くる

「待ってよ。ディオ。一体どうしたの？」

「後で話す。今は船を出す」

「きゃ〜〜〜」

つとシートベルトをしていないエミリアが後ろにぶっ飛ぶ。そして、後ろの壁にぶつかる。

「???、シートベルトしないと危ないぞ。」

「あんたが、いきなり動かすからよ!!」

くパルム・カリス都市

ここに、少女1人と男2人が走っている。男2人が少女1人を追いかけるように走っている。

「はあ、はあ、はあ」

「逃がすな!!」

「今日こそ捕まえてやる。」

「はあ、はあ、はあ、……きゃあ、」

少女が必死に走っていたので、足元を見ずに走っていたので、石につまずいてしまい転んでしまった。

「やっと追い付いたぜ。」

「まったく、世話をやかせるガキだ」

「あっあっあ、」

転んだひょうしに足をひねったらしく、立つことができない。

「お前がやって来たことをしっかりと責任とってもらっぜ。」

「このままガーディアンズに突き出すのは勿体ない。身体で払ってもらっぞ。」

「助けて!!」

つと男の1人が

「うるせえ!!」

バシッ

つと少女の頬をおもいつきり叩く。

「きゃあ!!!」

つと少女が右に転がる。

「助けを呼んでも無駄だ。お前がやって来たことを比べれば、大したことねえからな」

「さあ、ついてきな!!!」

つと男2人が少女に近寄る。

「こ、こっち来ないで!!!」

つと言ったが無視し近寄ってくる。

「デイ、デイクン!!!助けて!!!」

つと1人の男が少女の腕を持つとき、

ガシッ

つと少女の腕を持つ男の腕に誰かの手が掴んでる。腕を掴まれた男が腕を掴んでる青年に怒鳴る。

「誰だ!!!貴様!!!」

「俺か？俺は……ルークだ！！。」

ガヤガヤガヤガヤ、

「おい、ルークって、あのイーサンに続く英雄か」

「ああ、間違いないテレビに出てた。」

つと男2人と少女1人の周りにいた、人々が騒ぎだす。そして、腕を捕まれている男が

「英雄が俺に何のようだ！！今忙しいんだよ！！」

「子供をいじめるのにか？」

つとルークが言う。

ガヤガヤガヤガヤ

「おい、マジかよ」

「あの2人……たしか」

「ち、違う。このガキが俺たちの食べ物毎回毎回盗むからだよ！！」

「だから、叩いていいのか？」

「いや、そういう分けじゃねえが……」

つと青年が掴んでる手を離し、右手で頭をかきため息をつく。

「はあ。いくらだ」

「えっ？」

「その食べ物値段。」

青年が払うつもりなのか、食べ物値段を聞いている。

「5万6300メセタ」

「ほら、6万メセタある。釣りはいらぬ」

「えっ？」

「ほらほら、金払ったんだから、さっさと帰った帰った。」

「しかし、英雄さんよ、そういう分けには……」

「さっきの会話テープ、ガーディアンズに渡すぞ」

つと青年がテープの中身を流す。録音されていたのはさっき、自分達が言っていた会話が流れた。

「このまま帰ったら、許してやるが……どっするっ。」

「わかったよ」

「行こうぜ」

つと男2人がぶつぶついいながら帰って行った。

「ふう〜、何とか喧嘩にならなくてよかった」

つと安堵をするルーク。周りの人は、もちろんルークのやり取りを見ていたので拍手などといったものをルークに贈っていた。

そして、ルークは少女に

「大丈夫か？怪我はないか？」

つと聞いたのだが、

「……」

少女からは返事はなかった。

(4年前の会った時にみたいだな)

っと考えていると、

「ちょっとディオー!!置いて行かないでよ!!」
後ろから声がある。振り返ってみると、エミリアが、はあ、はあ、
いいながら立っていた。

「悪いエミリア。今は……」

っとエミリアに何かを言おうとしたが遅かった。

「ディオ……くん？」

っと少女がルークに言う。

「あれ?あんだ、何でディオの事知ってるの？」

ここまで来たら言い逃れは、出来ない。観念をしたのかディオは

「久しぶりだね。エリナ。」

っとディオが言う。

「えっ？」

つとエミリアが驚く。無理もない。ディオの本名を知っているのは、まだ公に公表してないし、ディオもエリナって少女もお互いの事を知っていたのだから。

すると少女は

「ディ、ディ、ディオくん!」

つと少女がディオに抱き付く。それを見たエミリアはもちろん驚く。

「えっ?えっ?ちよっ、ちよっと、ディオ!!!どづいづ事?」

「……リトルウイングで話すよ。」

つとディオはエリナを離し、

「エリナ、歩け……ないよな」

つとディオがエリナの前でしゃがむ。

「えっ?」

つとエリナが言う。

「その足で歩けるのか?」

「……」

つとエリナはディオの首に腕を回し身体をディオの背中にくっつけ

る。ディオはエリナの太ももを持つ。分かりやすく言うと、ディオはエリナを抱っこをしている（説明が下手ですいません）。

「……………」

「どづした？エミリア？」

「別に……………」

気のせいなのか、エミリアから少しだけ頬を膨らませてるように見えた。

「前も……………」

「ん？」

「4年前も……………助けてもらって、同じような事をしてくれた。」

「そうだったか？」

「うん、やっぱりディオくん変わってない」

（くん、って何よ、くん、って。年下の癖に、あ、私もディオより年下だ。でも、ディオに、ディオくん、なんて言ったことない。何？あの子）

つといろいろ考えてるエミリア。すると、

「あれ、ディオくんの隣にいる女の人は、ディオくんの彼女？」

つと驚きな発言をした。

「「えっ?」「」

ディオとエミリアの目が点になる。

「違うの? 仲良く見えたからつい……」

「じよ、冗談じゃねえ」

つとディオが否定をする。

「何で、仲良く見えるから彼女になるのよ!」

エミリアも否定をする。

「彼女じゃないの? じゃ夫婦?」

つとエリナが笑いながら言う。

「エリナ! お前からかうのはやめろ!」

「あたし達は、彼女でも夫婦でもないの! あたし達はパートナーなの!」

つとエミリアの言葉にエリナが

「ぶざけないですよ。ディオくんの本当のパートナーはわたしなの!

「4年前からのパートナーなの!!」

「とエリナが怒りながら言う。」

「お前ら喧嘩なんかするなよ。」

「とエミリアとエリナの喧嘩をやめさせろ。」

「とりあえず、話しは、リトルウィングで話そう。エリナ……
ちゃんと話せる?」

「……」

「エリナ?」

「うまく話せないと思うから、練習させて。人にあまり聞かれない
場所で。」

「多分俺の部屋なら聞かれないと思う。」

「じゃそこで話すね。ディオくん知り合いの方に話すとき、フォ
ローしてね」

「わかったよ」

そして、エリナがエミリア向く。しかし、

「えっと、」

「エミリアよ。エミリア・ミュラーよ」

っと自分の名前を言うエミリア。

「わたしの名前は、エリナ。エリナ・エフィーナ。ディオくん、ちよっと止まって」

「ん？」

止まって言われたので、止まる。

「どうした？」

「うん、ちよっとね」

っとエリナがエミリアをみて、自分の手を出す

「えっ？」

急に手を出されたので驚く。

「さっきはごめんなさい。(こっぴやって喋れたのも久しぶりだから)」

最後は小さな声だったので聞き取れなかった。

「「えっ？」」

「何でもない。ごめんねディオくん。行く」

「あ、ああ、そうだな。」

っと歩き出そうとしたディオ立ったが……、

「……」

「ディオくん？」

「ディオ、大丈夫？まさかまた……」

「エミリア、エリナ大丈夫だよ。ごめん。先進もうか」

っとゆっくりと歩き出したディオ。エミリアが何かを言おうとしたのをディオが止めた。それに気付いたエミリアは何も言わなかった。だが、気付いたのは、エミリアだけではなかった。エリナも気付いたが、言わなかった。

（4年前のディオくんとは違う……。わたしの知ってるディオくんは隠し事はしない。何で、どうしたの？ディオくん）

「エリナ？どうした？」

「えっ？」

どうやら、ぶつぶつ、言ってるのが聞こえたのだろ。内容は聞こえなかったが、気にはなったのだろう。

「ううん、何でもない。」

っと笑顔で答えたエリナだった。

そして、ディオ達が乗って来た船に乗り、リトルウィングに向かって飛んでった。

その光景を見ていた2人の人物がいた。

? 4 「今、そっちに向かったツスよ」

? 3 「リュウカイ」

? 2 「気をつけてるんだよ」

この2人の会話後に2人の上に一隻の船が通った。

? 4 「大丈夫ツスカね」

? 2 「転生したから、大丈夫だよ」

↳ ? 3 の船内

? 3 「ココデ、死ンデモラウゾ。ディオ、エミリア」

3 2 再会（後書き）

新ヒロイン登場。 デイオの妹もヒロインです。 出番は、少ないですが、つてか、作者は2人の事を忘れてました。 その2人にお詫びとして妹のソラ、弟のリオルは主に活躍する回を出し罪を償います。

さあ、次回は久々の戦闘の回・・・になると思います。

誤字、脱字がありましたら教えてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4736z/>

ファンタシースターポータブル2i～異世界の5人～

2012年1月6日23時46分発行